に行政的實現に堪ふるに在り。而して教育は社會が自個に於ける次の時代を作爲するに於いて尤も判明なる尤も有効なる尤も人意的理想實現の機關を供す。

第五。風俗慣習は、進歩的にあらざるも、一種の秩序を生成して文明の統整を促すに與る、又其個人に對する矯革力の宿る所として文明の機關たり。風俗慣習は社會文明の原始的所産として社會の自個實現の第一歩たり。其普通にして且舊きより、宗教に美術に關連を有し、儀式法制道德の或る淵源を供す。

第六。儀式が文明の機關たるや、一に人衆行爲の形式を齊整し、其調和を促して社會的協同生活の秩序を將來するに與る。二に行爲の修飾を效果して社交性の調子を成し、固有性普遍性を以て社會統制の機能を成す。三に遊動的行事に附隨して、美術と提携し、美的發達の普及擴衍を介助して文明の實現を進捗す。四に其嚴肅恭敬の意識は社會的生活の反射として人を内省、深沈、靜慮の境に置き、以て宗教と相提携す。總じて儀式の發達は文明の發生に伴ひ、其分化するや法制及禮儀となり、以て文明の程度に對する一の標徴を供す。儀式は其初や幅を廣うし、其終や高さを高うし、遂に禮儀に於いて社會秩序の一大要項となり、社會文明の一面の修飾となる。禮儀は儀式の尤も發達せる者、其更に大に發達するや漸く道義を形成するに向うて進む。

第七。法制は先づ其成績を以て文明の標徴と爲る。法制

の成績は、一に權威の性質に於いてし、二に權威司配の實地に於いてし、三に法制の本質に於いてし、四に法制の形式に於いてし、五に法制の要素に於いてす。就中法制の實質的要素の發達は尤も巨細に文明の程度を徴知するに足るものなりとす。法制は次に其力を以て、其劃一性を以て、其判明性及直接性を以て、文明の有效なる機關を供す、是等の特色より、法制は既によく保守性を脱却して世運の進歩と並行するを期するを得、但し其多數人衆を對手とする實現に規定せらるるの已むべからざるが故に、急進的變革を文明の上に將來するには至らざるものとす。[九六]

第八。慣習の發達して道德となるや、其中間的過程として儀式、禮儀、又禮あり、禮儀若くは禮、更に一進して各法制

九六　本著第三卷社會靜學第三篇第一章の全體、殊に第二、三、五、八の諸節を參照了解せよ。

及道德となる。慣習の更に意識的となれる者儀式を生し、儀式の更に社會的なる者禮儀を成し、禮儀の精神的なるものに名づけて禮といひ、禮の裁制的なるもの玆に道德を成す、而して、禮儀の更に社會的裁制を具有するものを法制とす。是故に法制に於ける權威は社會的裁制卽制裁にして、道德に於ける權威は精神的裁制なり。道德、就中德教の存立は、社會的實現の程度を表彰す、而して一面又人衆の實現を皷舞し向上せしむるに於いて社會的實現の一大機關を供す。德教の實效、亦實に文明の衆機關を介して、相須ち相伴うて社會的に實現せらるべく、文明の規定事項と相呼び相應じて其實現の樣式を決し、其實現の進程を成すべきものとす。

第九。經濟は、一に個人生存の根抵を供するものとして、二に有形物質的の仲介物に賴る文明の實現、卽ち文明の經濟的實現に於いて、三に文明衆機關の支持者として、文[九七]明實現の機關たり。又經濟は六項に於いて文明の形象を供す、生産の發達一なり、資本の發達二なり、貨幣の發達三なり、交通の發達四なり、經濟全體の趨勢が生産問題を中心とするより進みて消費問題分配問題に進むの事實五なり、分配問題解決の方針主義の變遷が直に産業組織の變遷と表裏を相做すの事實六なり。

第十。政治が文明の機關として文明進捗の效力を有するは、一に其背後に法制的權威を有するに由り、二に立法以て國家運營の理想を定め、政策以て理想と同時に實現に至り、行政以て一切の政治的實現に當るに由り、三に教政の內容實質尤も文明の衆事項を包含し、財政は經濟の政治的經營として間接に文明に寄與し、軍政民政亦文明の原由として又社會秩序の保障として文明の間接且側面機關を供するに由る。文明の成績たり形象たる政治現象の特に著明なるは、政體の變遷其一なり、政治の渾一的發達其二なり、政治の品質の上進其三なり。

第十一。以上の外、文明の尤も不判明且間接なる側面機關に階級、組合、社會單位、社會組織及社會對關あるを逸す可からず。

階級及組合の文明に各種の參劃を寄するは更にも言はず、社會單位は、其家族本位なると個人本位なるとによりて、社會文明の性質は

文明の衆機關の中、宗教的經濟は尤も無形なる物質的に關する多大の資美術と賴り難俗慣習赤多若干の風式と實現須つも亦非少くの關係いず恒心而尤て這唯を企そ般輕倘禮節關係遠緣係謂經德教恒濟絶持濟者つ能て所繫以機關所産的關係謂經濟關係謂關係謂關係謂

勿論、社會の繁榮凋衰を介してまた文明の繁榮凋衰に影響するに於いて、間接ながら亦是れ文明の側面機關を供す。社會組織が實質的及形式的に相異なるに隨うて、各文明の特質の緣由を供し、又側面的に文明の機關となるは明なり。衆個社會の對關は通例國際關係と稱する所、尤も大規模なる社會組織に外ならず。社會對關に無關係あり、自保關係あり、平和的あり、鬪爭的あり、理想に於いては又統一關係あり、自由關係あり。無關係は文明に寸益なく、自保關係は文明を小規模に發達せしめ、鬪爭關係は經濟的人口的損失と智能的道德的所得とを效果す。[九八]此の如きは社會對關が側面的間接なる文明の一機關たるの數例なり。

九八　拙著戰爭論に稍〻詳なる說述あり。

第六節　文明の力

文明は力なり。文明は社會の力なり、社會に固有なる力なり。

エチルギイは仕事を成すの能なり。力は運動の原因なり。運動量は速度と質量とに隨うて消長し、仕事は力の平方と質量とに隨うて消長す。文明は社會の自個實現の總束にして、之を具體的に觀れば仕事なるが、其自個を抽象的に觀れば力なり。

文明を抽象的に觀るとは、文明の具體的總束より社會の具體に屬する分を省除し去りたる剩餘にして、是れ卽ち眞の文明其自個なり。斯かる文明其自個は、具體的總束に於ける文明より、第一に主體たる社會を省除せるものたらざるべからず、第二に文明の惰性的進動を省除せるものたらざるべからず、卽ちmv^2の中、mとvとを省除せるものたるを要するが故に、剩る所はvとなる。然るに文明は、斯かる運動、寧ろ速度を社會に與ふる所の原因なるを以て、運動の總量を表するには、社會の質量の今一度此に入り來るを要す。單に速度を以ていふときは、是れ文明の速度なり、文明其自個は、如何に抽象的に觀るも、これと質量との二つの廣袤を有せざるべからず、卽ち是れmvにして運動量に該當す。

若しそれ斯かる分析立證を休めて、大體論より本命題を立せむか、殆ど平易なる自明の理に近きものあるを見む。文明は自個に於いて存立發達を遂げ、他に向うて感化擴衍の功を成し、文明の存する所、文明の及ぶ所、必ず社會に何等かの變遷進動を致さずして已むことなく、必ず社會の根柢的實現に影響せずして已むことなし。文明は必ず文明を效果す。文明は單に文明の規定たるに止まることなく、必ずや其效果は文明に於いてす。卽ち文明や實に社會的の一の大なる力にして、此力や社會に固有なり。

文明は社會の自個實現の總束にして、何等社會に對して超絶的の關係あるにあらず、亦社會に對して附隨的附加的の事項たるにあらず、文明は社會の本質より發する、その自個實現に於ける一の屬性としての發現に外ならずして、其性質に於いて、其廣袤に於いて、偶名づけて力と謂ふ可きものたるなり。文明は社會の力なり、とは此の謂なり。

然れども文明は所謂社會力なるものにあらず、社會的現象を惹起す所の原由を力と看做し、之を呼ぶに「社會力」を以てするに於いて、文明はかかる所謂社會力の一にはあらざるなり。文明は社會的現象の原由に非ずして、實に一切の社會的現象の成績に周流する所の力なり、文明は既に社會ありて後その社會の自個實現に於いて來る所の力なり、所謂社會力と混ず可きにあらず。

文明は又社會の動因にあらず。社會に於ける生生滅滅の現象の連續に於いて、此生生滅滅、變動現象の原因を呼びて動因といふが、文明は斯かる單純なるものにあらず、又動因の如く社會に對して偶然的事項を含むものにあらず。文明は生生滅滅の際、卓然として、較、永住的の成績として存留するものに於いて存するものたり。文明の發生發達や、固より社會の動因と不可離の關係あるも、直に之を此と相混同

するを避くるは必要なり。

文明の力は、或は自存に現れ、或は對外に現る。是に於いて文明の持續力、發達力、感化力、擴衍力について考察するの要あり。

第一。文明の力の尤も本始的なる、尤も單純なる發現は、其持續力に於いてす、又之を把住性といふを妨げず。

文明は自個に於いて自個を持續するの能力を有す。蓋し社會文明は既に種種の機關に由りて實現し、其成績は各種の社會事項に浸潤して、其眞髓根抵を形成す。文明は其自個既に一種の力なるを以て、其本質に於いて常住的なり、其託寓に於いて亦斯く社會の具體的諸方面に亙るに於いて、文明の把住性は成立し、其力たるに於いて持續力となる。

文明の持續把住は他より之を助成するを待つものにあらず、文明の自體に於いて恒久に存續するの性能を具ふ、文明は、他より其存立を戕害すべき原因の加はり來ることなき限り、又文明の機關の存立の殘害せらるることなき限り、退轉亡滅することなし。

文明の機關の社會に於ける存立の殘害せらるるありとも、尚文明は潛的形式に於いて依然として其力を存し、其一たび社會の具體的事項と協働するや、乃ち仕事を成すの能を效果す。

文明の、社會に於ける機關による存立の、害せらるるとき、文明は往往僅に殘物斷片を留むるのみ、而も文明の力の恆久なるや、此殘物斷片を緣として、一たび異時社會に於ける因緣和合の機に際する、忽ち復た蘇生繁榮す。希臘文明が文藝復興以降の歐西社會に復活せる、佛敎文明が我日本の社會の特性、日本固有の文明の一部と結合して以

て一種の複雜なる文明を繁榮にせるが如き、皆如上の事例を供す、是れ皆文明を以て力と做して見解を立するに於いて明確易解なるの事證なり。文明の持續把住は、文明の力の一種の現れに外ならず。

第二。文明の自存に現るる第二の力は、文明の發達力なり。文明は一の恆力なり、恆力は加速度の原由となる。文明は其自體に於いて發達開展の能力を有す。

文明の機關は往往次第に發達す。機關の素地たる社會の要素は、尤も斯かる加速度的發達を成す。人口の增加は其尤も著きもの、隨うて社會に於ける人的動因及人的活動の總量は、常に發達增進の狀勢に在り。

文明の託寓たる社會の要素及機關、一旦朽廢に委するある、文明の發達は玆に休止すべしや。顯的事實としては固より然り、而も文明は潛的存立を遂ず、其開展性亦唯潛的存立に移り行けるのみ、何等亡失に瀕せるにあらず、[九九]文明の發達性は乃ち常住なり。

斯く具體的存立の得喪と顯潛とに拘らず常住なる發達性は、是れ亦唯文明を一の力と解するに於いて確立易解なる事證なり、發達性は卽ち文明の發達力なり。文明の發達は向上力なり、文明の擴衍は向前力なり、自ら別事に屬す。[一〇〇]

第三。持續力は尤も存立に固着せる單純にして本始的なるもの、發達力は此に次いで較、複雜にして副生的なるもの、此兩者は孰れも文明の自個に附隨して其作業を遂ぐる所の力の現れなり、尋いでは文明の向外的作業に於ける其力の現れなかるべからず。就中文明が社會成分、個

九九　此事恰も猶種物の種子が冬季に於いて地の溫潤、光、溫を有せざるに際し尚其他の機會を有せざるに際して爾木化日亭々たる爾成すべき發達性を失へりと看做すべからざると一般なり。

一〇〇　Ratzenhofer: Wesen und Zweck der Politik 388. は少しく此處別な明にせざるが如し。

人に向ふ作業は、感化力として現れ、外社會に向ふ作業は擴衍力として現る。文明として同じく向外的なれども、社會としては向內的なるもの、感化力にして、社會としても亦向外的なるもの卽ち擴衍力なりとす。擴衍は外的感化にして、感化は內的擴衍なり。

社會に於ける衆個人が尤も切に文明の力を感ずるは實に文明の感化力の爲なり。凡そ文明の具體的有形的事項は供用資用に由り、其抽象的無形的事項は暗示模倣に由りて、社會の衆個人を統制し、以て感化の功を成す。社交性は此作業の好緣を供し、交通協力は此作業を進捗し且容易にするに大造あり。

文明の感化は、社會に於ける自然出生の衆個人に及ぼすを第一種とし、他の社會より新に入り來れる衆個人に及ぼすを第二種とす。就中個人が文明の力を感ずるの尤も大なるは第二種に在り、第二種は實に感化と擴衍との中間位に在るもの、尤も內的擴衍の目に適ふ。

文明の感化力は、其效果、衆個人に於ける力の分布を成す、是れ感化が亦一種の力の現れなるが爲にして、斯く力を享受せる個人は、社會の成分として、或は顯的、或は潛的に、文明の力の作業を成すの能力を儲ふ。[一〇一]

文明の感化力の作業は個人によりて難易あり。一般に、幼者に易く、成人に難し。婦女に易く、男子に難し。怜悧なるものに易く、遲鈍なるものに難し。自社會の個人に易く、外來の個人に難し。文明の自發的なるに隨ひ、社會の歷史的

一〇一　社會が外社會との交和に於いて個人への流通あるときは、例へば、留學生の派遣に依りて、勢力交和、遣はるが如きは、文明の感化力の此過程の作業を遂ぐるものに外ならず。

閲歴に富めるに隨ひ、文明の機關の具はれるに隨うて、文明の感化力は效果を大にす。

第四。擴衍力は文明の力の尤も熾盛にして大規模なる現れなり。凡そ社會文明の內に成熟するや、必ず更に外に向うて擴衍するあらむと擬す。文明の擴衍は、具體的なる文明の機關の外社會に向うての擴衍を致し、而して其奥底には則ち文明の力の流通を成す。文明は其力を以て、其機關、殊に其形象を外社會に擴衍す、之を名づけて文明の擴衍といひ、其奥底に存する力を文明の擴衍力といふ。

文明の擴衍の主要なるは、有形より無形に及ぼして次第すれば、國語、制度、生活狀態、及德敎の四項に存す。

一。國語の內容は、社會の公表象、卽ち該社會文明が有する知識の總束なり。二個の社會、若くは之に屬する個人の觸接あるや、國語の競爭は直に始まり、甲は乙に、乙は甲に向うて各自個の國語を擴衍せむとす。[101]國語の優劣は、有用なる知識を有するの多少を以て其實質的標準と爲し、最小の時間に最大の明晰、精密、及順當を以て諸般の表象を表現し通達するの能否を以て其形式的標準と爲す。文明の擴衍の第一着に在りて、必ず國語の擴衍を見るは、右の實質的標準に於ける國語の文明的價値に由緣し、其擴衍の成績は、一に右の形式的標準の價値に由り、二に擴衍を受くる社會の衆個人の本性の欲求が右の實質的標準の內容と契合するの多少に緣りて定まる。されば文明擴衍の方策として、國語政策は尤も數〻愛用せらる。隨うて能動

[101] 此場合、事實に於いては優者より劣者に向ふの擴衍ひとり顯著なり。

政策と共に又所動政策あり、甲は自個の國語を他に及ぼさむが爲にする諸般の政策にして、乙は他の國語の自個に擴衍せざらむが爲に防拒を講ずる諸般の政策なり。

二。文明の擴衍は第二に社會各般の制度に由る。各般の制度、其優勝なるものが劣惡なるものを壓して擴衍するは自然の傾向たり。但制度の優劣は幾分か社會民族の特性に關し、抽象的に一定の判別を下し難きが、文明の擴衍に於いては、殆ど這般の特殊的事情の顧慮を容るるの餘地なきこと多し。凡そ各般の制度に由る所の文明の擴衍は、或は主として自然的理法に率ふものあり、或は任意的なるあり、概して實地に於ける便利幷に社會の進度及性質に適應するの如何によりて、蠻民以來文明民族に至るまで、とりどりに實效を奏するものとす。

政治制度及經濟制度は、殊に優勝文明の社會が自個の便宜上より何の顧慮なく之を劣弱社會に擴衍すること數〻なり、但經濟制度の擴衍には、人意の如何ともする能はざる社會經濟の理法に本づける優勝劣敗なきにあらず。政治制度に在りては、斯かる自然的理法の司配少く、寧ろ社會の政治的統制力、卽ち政治團體としての國家の威力より、强は弱を壓し、强者の政治制度は弱者のを壓して擴衍を敢てし、其效果、明より暗に、高より低に趨り下ること罕ならず。[一〇三] 政治制度の擴衍には、二個社會の間に先づ制度の同調を成し、然る後政治的結合團體として社會の沒入併合を成す文明的手續と、先づ此沒入併合ありて然る後制度の擴衍ある政治的手續となり。甲は合理的なるも、乙の任意的非合理的なるが却て數〻行はるるは、上述の理由に本づく。

宗教制度の擴衍に於ける教會の設立は、殊に宗教に固有なる無上絕對的價値の性質、隨うて其侵略的性質に本づき、文明の擴衍に於いて極めて重視せられ、往往其第一歩とせらる。宗教制度は宗教と別な

一〇三　マケドンの專制が希臘の民政を壓せるの類これなり。

れども、實際宗教制度の擴衍は宗教の擴衍と密着不離なり、宗教の擴衍は人の良心の自由の範圍に屬する事項なりとするも、宗教制度の擴衍は社會制度の擴衍の一項にして、直に社會の自衛若しくは攻他政策の範圍に觸れ來る問題なり、是れ宗教政策の對外的方面なり。凡そ宗教制度の擴衍に抗拒するものは、唯同一範疇の優勝制度あるのみ、而して其優劣は、制度としての形式的標準、及宗教の內容が當該社會人心に對する適否、卽實質的標準、此二者によりて定まるものとす。

教育制度の擴衍は、また文明の擴衍の重要事項たり。就中學校は先鋒として特に擴衍性に富む。教育の利益は、極めて野蠻なる民族の外、衆民族の夙に熟知する所、乃ち學校の來侵は、苟くも此に對し此に優れる制度の既に備はるなき限り、幷に學校教育の內容及其制度の形式が甚だしく當該社會民族に不適合なるなき限り、決河の勢を以てし、之を抗拒するは不可能事たり。定期刊行物、次いでは書籍の如きも、亦漸を以て社會に浸潤する所の教化制度にして、文明の擔夫として太だ重要なり。

慈惠制度は亦文明の擴衍に與ること淺からず、病院、賑恤、戰爭に於ける傷病の療養及慰問等皆是にして、多く宗教制度の擴衍に際して騈用せられ、時として又單獨に施行せらる。心理の所謂一般感情が爾時の一切經驗に調子を與ふるの理法に洩れずして、是の如きは文明の擴衍を容易にするの效果顯著なりとす。

三。文明の擴衍は第三に生活狀態に由る。各社會民族の生活狀態の差違は、社會の規定を遠因とし、智能の發達を近因とす。生活狀態の優劣あるや、人性に固有なる欲望は直に劣れる生活狀態を移して優れるものとするの傾向を呈す。此生活狀態に文明の成績の少からぬ部分は藏せらるるを以て、生活狀態の擴衍はやがて文明の擴衍なり一般に風を移し俗を易ふといふこと、亦唯生活狀態の移易に止まること多し。

四。文明の擴衍は第四に德敎を介す。德敎は文明の成績の最も心的無形的なるもの。抑、相觸接する二個の社會、其奉ずる所の德敎を相異にするや、玆に德敎存立の競爭を現す。德敎の實地社會生活に對する優劣は、是れ其競爭に於ける成敗の岐るる所にして、其優者を有する文明は、玆に德敎を介する所の擴衍を成す。普通に所謂德敎には、現實的德敎と理想的德敎との區別あり、文明の擴衍は、主として現實的德敎に由るが、理想的德敎は、數、社會間の戰爭の原由となる。

現實的德敎は、或は風俗慣習と調和して存立し、或は宗敎思想の裏に存し、生きたる力として民風を化導するの效績を成せども、理想的德敎は、概して哲學の裏に寓し、若くは耿介脫俗の奇士の言行に實現せらるるのみにして用を當世に成すを得ず、空言、空名、空文に止まるもの卽ち是なり。斯かるは德敎の優劣に於ける劣者たるを免れず、宗敎の實踐的敎諦の中、這般を含むこと亦罕なりとせず。

文明の擴衍は斯く多端なる事項を介して成るが、其奥底には文明の擴衍力あり。文明の擴衍力は文明の力の尤も顯明なる發現なり。文明の力は此場合恰も一のポテンシアルとして發現し、大より小に、强より弱に向うて流動す、其力學的發現は是れ卽ち文明の壓力なり、其對抗の關係に於けるや乃ち文明の抵抗力を成す、斯くして相觸接する兩社會の間に、文明競爭、若くは時に文明的競爭を起す、是れ理想的社會陶汰作用の一行徑なり。文明の力が社會活力[一〇四]の主要なる一部たる所以は尤も文明の擴衍力に顯著なり。

一〇四　本著第二卷社會理學第四篇第一章第十節參看。

文明擴衍の效果を査するに、先づ特定文明が其實現の領域を擴大するに存するも、そは畢竟ポテンシアルの流動に外ならざるを以て、漸くポテンシアルの平準、卽ち消失に向ふ、卽ち文明擴衍の效果は漸く文明競爭の減衰に進むものとす。而も文明の力は此と共に毫も滅失せずして、其持續力、發達力及感化力としての發現は益〻長成す。文明競爭の盛なるや、時として擴衍に好都合なる方面にのみ文明の力の發現を促して、或は持續、發達、感化の諸方面を閑却することあり、文明の不健全なる特色の過度なる發達は[一〇五]往往文明が對外的作業に忙しきに際して見る所にして、其極文明の削弱に終ること罕ならず。文明擴衍の效果は、漸を以て斯かる偏癖助長の機會を減削し、文明の力をしてその健全なる發達の方に向はしむるものとす。

一〇五 歐洲文明の一例なり。歐洲文明の基督教主義の偏癖、過大なる基督教文明の特性なり。其決して持續發達は、發達に及ぼす大なる力あるなり。

第七節　文明進動の方式

文明は力なり、其存立は必ず動的力學的存立ならざるべからず、卽ち文明の存立は必ず進動的存立なり。

文明進動の方式を吟味するに、大局より之を觀れば、文明は律[一〇六]を成して進動するもの、波瀾起伏の狀態に於いて進動するものなり。小局より之を觀れば社會文明の一代記は、此大局に於ける一個波瀾の全徑を以て終始するものたり。

一〇六 Rhythm.

文明は社會の自個實現なれば、社會の存立發達に於いて文明は其實現の精華として存立發達し、社會の凋衰枯

死するに於いて此社會文明は亦凋衰枯死を運命とするを免れず。文明は其主體たる社會と與に生じ、與に榮え、與に衰へ、與に枯る、是れ卽ち文明の一代記にして、實に小局觀に於ける文明進動の方式なり。斯かる文明の小方式を概約すれば、文明は四期に於いて其進動を終始す、未開、半開、完開、過開卽ち是なり。未開の前は未存立なり、過開の後は既死滅なり。乃ち文明の四期是の如し。

文明は、未開期に於いて、未だ其存立の規模をだに全うせず、況や其內容をや、唯內に强盛なる發達力を備へ、潛的の力を有し、以て他時の發達の素地を成す、是れ社會草創の當時に於ける境地にして、心的性狀よりすれば主として意志的に偏す。乃ち謂ふ所の未開は野蠻を意味せず、唯

一〇七 Alfred Vierkandt: Naturvölker und Kulturvölker 殊に其第四—七章に於いて此事項を論じて詳なり。勿論其論旨全く著者のと契合するにあらず。

文明の幼年期を意味すること明なり。

文明の更に進みて半開期に入るや、存立の規模は粗、建つに至れるも、其內容は猶未だ多くの闕漏を存するを免れず。規模の先づ建ち形式の先づ過大なるに至れるより、潛的の力の寧ろ未開期に比して薄弱に陷ることあり、而も社會は、總體としては發達に向ひつゝあるが故に、此闕漏、此薄弱は、次第に補充せられ、次第に恢弘せらる、唯一時存立の危機に陷る、是れ半開期の往往遭逢する所。心的性狀に於いては主として智的に偏す。乃ち謂ふ所の半開、亦野蠻の少しく飾られたる半開と意味を異にするは明白なり。

文明は更に進みて竟に完開期に入る、是れ社會の存立

の完全を告げたる時機に見る所、其規模に於いて、將た其内容に於いて、完成に達す。唯斯く完全なる開展を遂ぐるに於いて、潛的の力は往往著しく減耗し、其完開狀態を持續するの困難を見ること罕ならず。此困難は外面的成績の完全に正比して增大す、一〇八是に於いて完開はやがて一轉して過開となる。心的性狀に於いては智情意の孰れにも偏せざる圓滿なる性質を有す。

文明の竟に過開期に陷るは、上述の理由によりて殆と避け難き所、完開は其裏既に過開に陷るべき禍機を藏す、一〇九而して社會亦頽然として玆に老い、文明は漸く其規模を小にし、亦隨うて其内容を薄うし、内容事項、各個の存立價値に大なる增減なきに於けるも、亦尙事項相互の關係に於いて支離崩解の狀勢を馴致し、文明の渾一的價値の著しき減耗に向うて急ぎ行く、是れ此期の常相なり。心的性狀に於いては、主として情の偏重を見、其調子や衰颯の哀音を帶ぶ、文學、宗教の如き、尤も容易に其特徴を現す。

過開の後に來る局面は文明の朽滅なり、而して文明の一代は玆に了る、文明進動の小方式、是の如し。社會の崩解と共に、當該社會の自個實現としての文明は此の如くにして了るも、而も文明の力は斯く無常なるものに非ず、其持續的恒久的存在は、更に何等かの方式に於いて進動を成さざるべからず、是に於いて文明進動の大方式あり。

文明は、其進動の小方式の一巡するに於いて、一旦社會と共に顯存する所以を失ふと雖も、文明の力は玆に滅失

一〇八　外面的成績は表面張力の如く、持續力は内的潛力の如く、彈力なるのに正比して表面内の大彈力なるのに比し、故業本方文面の理法あり。

一〇九　之を營修するは唯絶大なる人意の努力に須つあるのみ。

するものにあらず、乃ち顯存を轉じて潛在と爲し、再び適當なる社會民族と結合するに於いて、乃ち其顯存を得るものなり。今斯かる潛在の形式を吟味するに、文明は社會民族の滅亡に於いて其渾一的存立を失却し、唯僅に文明の機關、殊に形象の遺留するを見るのみ。而して此遺留事物に、有形あり又無形あり。有形事物は文明の形象たる生活の用品、[一一〇]美術、文學の類是なり。無形事物は人人の心意に存する文明の印象、傾向、勢力、是なり。文明一たび其渾一的具體的存立を失ふや、其潛的存立は實に是等の事項に於いてす。さて斯かる潛在的文明が再び適當なる社會民族と結合するは、卽ち文明が、漸く社會民族の實地活動の源泉として、其散在狀態、其斷片的存在より囘復して、復其渾

一一〇　皆て生活狀態の特殊なる形象を成すに與りしものを謂ふ。

一的存立を得る所以。唯其實地に於けるや、純粹に舊文明の復活なる場合極めて罕に、舊文明を其重要なる組成要素とする所の新文明なるを常とす、是れ文明の規定の理論上、應に然るべき所たり。

抑、文明が斯く律を成して波瀾起伏するは、文明固有の性質に本づく、今之を解說して四項に約す。

第一。文明は其未開半開より完開に進むに於いて、漸次外面に於いて其力の實現を成すと同時に、內面に於ける其潛力は減耗す、是れ文明は一種の實現にして、而して實現の根抵たる文明の力は必ずしも此實現に應して增大せざればなり。是故に、文明一代の進遷は、文明の持續發達の根柢たる力の上に二重の損失を來す、一は實現の增大

の爲に之を支持する力を要するの益〻增大すること、二は實現に要せる力の增大の爲に其剩餘たる潛力の愈〻減耗すること、是なり。而して此潛力の到底以て實現せられたる文明を支持すること能はざるに至るの時は、卽ち文明の退步を始むる時期なりとす。然るに、文明、其寄托たる社會と與に退步して、社會の文明的實現、其規模を小にし、其範圍を狹うするに至れば、文明が實現の成績の支持に費す所の力漸く輕減し、顯力は漸次潛力として回收せられ、實現の縮小の爲に顯的存立は益〻微弱となるも、其潛的存立は玆に漸く確と强とを加ふるなり。此の如きは、社會が外界より不時の損耗毀壞を蒙れるに際して殊に顯著なる所とす。凡そ文明が潛より轉じて顯に入るは、必ずしも新なる社會民族との結合に賴るを要するに非ず、斯かる外界より社會を壓迫する原由の去るあるや、亦能く文明の顯的存立の回復を見、文明は玆に復び隆昌の運に向ふ。

第二。文明一たび其隆昌の一定度に達するや、玆に、其擴衍は盛に行はる。文明の擴衍は文明の外文明に對する作業なるを以て、往往其特質異點を開展するに癖して、這般の特質異點の利害得失を究めず。然るに這般や時に不健全なるものあり、是に於いて擴衍に伴ふ如上の事項は、往往却て文明の內的危機を釀す。但し擴衍の結果は漸く斯かる特質異點の平準を促し、而して擴衍による這般の弊は次第に減少し、文明は一旦其弊を受けて更に復健全を回復す。是れ亦文明進動の律的なる所以の一因たり。

第三。文明は、其發達の進程に於いて、久しうして漸く弊を內に生ず。凡そ文明の機關、宗敎、美術、國語、各種の社會制度、其存立の久しきに於いて一種の副產物を叢生し、其被覆する所となるによりて、其以後、以上の發達を害するに至るもの、比比皆然り、殊に機關の合理性の大小に反比して此弊に小大あり。

宗敎の發達は、必ず敎會制度の發生發達を伴ふ、而して敎會は宗敎の被覆者たると同時に又其束縛者たり、敎會の組織、及其成員たる個人、其孰れに於けるも、弊の生ずるや、之を受くるものは畢竟宗敎其者ならざるを得ず。美術の發達は、多く形式主義を喚び起し、且美術表現の實質、卽ち題材の必ず伴ふより、美術の發達し成績の美果を見るに隨うて題材の範圍は縮小し、技巧に於ける創意の範圍も亦縮小して、美術は次第に淸新を失ふ、是れ美術の發達が美術向後の發達を阻遏する所以なり。國語に於けるも亦復此の如く、其發達は必ず新なる表象を表する單語及語法を加ふるの已む可からずして、而も是れ實に國語存立上の危機たり。語法の秩然たる存立は、恰も猶人體の步行に於いて且釣合を失し且釣合を回復するの間に行進を成すに似たるものあり。且單語に於ける意義の轉換は、國語の發達上免れ難き所たり。加之、國語の擴衍は、殊に地方的訛語を輸入することによりて國語の存立を危うす。是故に國語は斷えず其發達に伴ふ弊を芟除するに力めざれば、竟に救ふ可からざるに至るものとす。社會各種の制度は、其の發達するや、第一に過繁過大の弊を伴ひ、第二に制度固定の弊卽ち制度が實用に遠ざかりて形式的存立に流るるの弊を伴ひ、第三に制度の成員たる人の間に生じ、起る所の弊のやがて制度の弊なるを伴ふ。是れ皆制度の發達がやがて制度を害する所以なり。其餘文明の機關に於けるも、亦皆此類の事象あり。

一一一　時代の必要の既に立れる場合に猶依然として制度の嚴存し、而して社會制度はそれだけ形式的存立、制度固定の弊を加ふ。

乃ち文明の發達は、必ず一面に文明の弊を伴ふ、而も是れ

皆發達せる文明、文明の顯的成績に伴ふものなるを以て、一たび文明の顯的成績の打破せられ、文明の潛在して宿根に歸し了するや、這般の弊も亦一時に盡き、文明の再び顯るるに於いて更に新なる生面を開展す。斯くて文明進動は、此點よりも亦律を成して現する所以の一因を存す。

第四。文明の實現大に進むや、社會の秩序尤も進み、進歩は往往此に伴ふを得ず、是れ文明の力と實現との關係上已むを得ざる所なり。蓋し文明實現の進むに隨うて、社會の成分たる個人が單獨に行動すること層層困難となり、同一の實力を以てするも、社會水準を拔くこと次第に困難を加ふ、加之個人的實力も、亦從來の社會文明の造詣、規模、範型に控制せらるるの大なるが爲に、大に發揮を縱にするの機會に乏しきを致して、其實地活動は多く模倣的となり、創意的活動漸く衰耗す。斯かる活動は、是れ文明的實現にあらずして、實に實現の反複描寫に過ぎず、故を以て文明の進展は、此點よりも亦其裏自ら既に衰頽の機を藏するもの。夫れ文明の崩解は社會の崩解に伴ふ、社會の崩解は體制の崩解なり、體制的行動の減衰なり。此の如きに際しては、個人的行動、漸く著明となり又自由となり、而して個人の活動舊社會の各部に起り來る。這般は乃ち文明の新なる動力を供するの萠芽にして、其糾合せられ統整せらるるや、漸次新なる文明の中心を生成し、以て文明の復活を見るに至り、而して這般の中心は、同時に又必ず體制の中心を供し、而して社會統整の萠芽を供す。是故に

社會及其文明は、崩解朽壞の極點に際して、夙く既に新局面開展の胚珠を藏し、之に反して文明が社會の自個實現として尤も其力を放にしつゝあるの時、夙く既に衰頽の初程に在るもの、是れ亦文明をして律を成して現せしむる他の一由たるなり。

斯の如く、文明は、其小局より觀れば、生し、昌へ、衰へ、滅ふと雖も、其大局より之を觀れば、生滅は唯一時一局の事象にして、全體に於いては律を成して進動す。唯特定文明にして全然人間社會の史迹より其蹟を絶するの場合あるは、文明の寄託たる形象成績、文明の主體たる社會、其成分にして文明の無形的寄託たる人衆、人心が、俱に全く滅絶するに於いてするのみ。此場合に在りても、社會及人衆の滅絶が或る對敵の爲に行はるるに於いては、文明は幾分を此對敵の社會民族に寓して以て永存を遂ぐるに至るを常とす。文明の力は實に是の如きものあるなり。

第八節　文明の目的

文明の目的は他なし、社會進化を成すに在り。

文明は斯く進動するが、文明には究竟の目的ありとすべきか、此疑問を積極に答ふるは唯形而上學之を能くす。凡そ形而上學的思索を以てせむか結局論の見地を立つること容易にして、文明には目的ありといひ、此目的は、或は道德的なり、或は美的なり、或は智能的なり、或は生活的なり、等といひ得べく、更に其綜合的なるに於いては、文明の目的は人格の開展に在り、などいふを得べし。然れども此の如きは多く形而上學的人生觀の前提より演繹せられたる主觀的斷案にして、凡そ結局論上の詮議を實理的に解決せむは至難の事に屬す。文明の

目的を解して社會の自個實現の究竟理想といふ意味となすことは社會學の甚だ長ぜざる所、今は之を闕くを適當とす。而も文明當面の目的、常住の所期、寧ろ文明の規矩ともいふべき意義に於いてすれば、文明の目的は尙言ふ可きあり。此解釋は、文明の實質的目的を與ふるよりも、寧ろ文明の形式的目的を供す。

社會進化は社會の自個實現の成績なり、卽ち文明の成績なり。蓋し社會進化は宇宙進化の連續にして、特に其最上最高の一節を占む、而も社會進化は社會以外若くは以上の或存在に規制せられて以て其現象を成すにあらず、社會進化は宇宙の他の實在の力によりて行はるるにあらず。宇宙進化の孰れの局面も、そが當該の宇宙の分內に於ける活動の效果に外ならざるが如く、社會進化亦實に社會分內の活動の效果なり。

社會進化は人的進化なり、自由的進化なり、而して秩序及進步を以て其方式と爲す。

社會進化に於いて始めて進步あり。宇宙進化は、天體進化及生物進化に在りては、唯社會進化に漸次接近すといふの外、進化は變動にして進步にあらず。進步は必ず理想の實現、知の行たるを要し、而して理想や實現や天體又は生物には全く之なく、唯人間に於いて之有り。天體及生物に在りては現象ありて實現なし、實現は理想を豫想し、理想は自由選擇と理法の認知及協合とを豫想す、而して此二者や實に高尙なる心意活動卽ち思想の存立を待ちて始めて現る。社會進化が進步を以て其方式の唯一に數ふるは斯理由に本づく。

社會進化が更に秩序を方式の一とするは、社會が有機的意識的渾一體たるに本づく。第一に、秩序は一個の渾一體に於ける均齊の狀態なり。秩序は單體の內部に存することなく、衆個の單體にして個個別別の存立を成すに存することなく、衆個の單體の聚在にても其範圍其組織の劃然として一定せざるに於いて秩序の存することなく、秩序は必ず渾一體の內部に存せざるべからず。秩序は渾一體の內部、各部相互の關係の不安定且動搖に存することなく、秩序は必ず渾一體の內部に於ける均齊の狀態に存立す。第二に、社會的秩序は社會渾一體の內部に於ける其成分又は部分各個の意志制限の狀態なり。社會の成分たる衆個人の意志は、相互に或は駢行し、或は背馳す、其背馳するものは、時に矛盾衝突を免れず、此矛盾衝突を免るるが爲には、必ずや何等かの方法にて意志制限の行はれざるべからず。部分たる機關、若くは階級、組合間の關係も、亦復此の如し。凡そ意志制限の狀態あらざるや、社會的秩序の成立あるを得ず。第三に、社會的秩序は社會渾一體の內部に於ける、其成分又は部分各個の有意的意志制限の狀態なり。社會的秩序に於ける意志制限は、機制的なるを得ず、機制的、盲目的制限は以て秩序と爲すべからず、秩序は必ず其人的渾一體の成分に發せざるべからずして、乃ち必ず是等個人若くは人衆の聚合に於ける有意的意志制限に由らざるべからず。夫れ社會的秩序の意義や、右三段の解說之を明にす。斯かる秩序は、是れ社會進步の成績

を社會が自個に把住する所以にして、兼ねて其以上の進歩に向うて渾一活動に出でむと擬するの勢を成す所以なり。社會進化の一方式は、必ず秩序を以て進歩と相駢べざるを得ず。

之を要するに、秩序は靜的なり、進歩は動的なり、靜動二面相竢ちて進化乃ち成る、社會進化の二方式や實に此の如し。

文明と秩序及進歩との關係は實に密接なるものあり。文明の規矩は秩序なり、文明の所期は進歩なり。抑〻文明は實現なり、社會の實現なり、乃ち社會進化に於いて進歩をいふと同一の理由に於いて、文明の所期としての進歩を謂ふ可し。文明は社會の自個實現なり、凡そ主體自個の存立を整ふるは自個實現の一要諦たり、文明は必ず社會秩序の剏建及維持を以て其事業に數へざるを得ず、社會進化と秩序との關係は、亦直に文明と秩序との關係に擬す可きものなり。

凡そ自個實現には進歩及秩序の二面を伴ひ、進歩及秩序を以て經緯を相成す所の進動として文明は存し、社會進化は存す。然らば則ち文明と社會進化とは畢竟同一事の異名なるか、曰はく否、文明の目的として社會進化は存するもの。文明は社會の自個實現の總束なり、社會進化は這般文明の成績なり、這般文明の宇宙進化に印する所の成績なり。文明には波瀾起伏あるも、社會進化は常住なり。

夫れ社會進化は宇宙進化の一段節なり、社會進化は特定社會の興

亡存滅に拘らず恆久に連續する、大なる現象なり、大なる作用の成績なり。文明は社會の自個實現にして、其現るるや必ず主體たる社會の存立なかるべからず、隨うて文明進動の大勢や、之を小觀すれば全然社會と共に終始し、之を大觀するも亦實に律を成して進動するを免れざるも、社會進化は恆久に次第に開展する所の大なる現象作用の連續なり。社會進化の形相には多少曲線的變化あるも、こは唯社會進化の表面に於ける小波たるに過ぎずして、社會進化の大勢は毫も爲に影響せらるることなし。特定文明は、此大なる社會進化の徑行の裏に在りて、且生し且滅するを運命とす。唯此特定の文明、此生滅ある無常なる衆特殊文明の裏に徧く存して、若し一般に文明、特定ならぬ文明と稱すべきものありとせば、そは實に社會進化其事と契合する所のものたるなり。凡そ社會進化は大觀せらるべく、常住恆久なる開展的連續現象として目せらるるを要するものたり。

此常住なる、恆久なる、社會進化に於ける、進歩の速度は、之を測定すること容易なり、而して據りて以て其樣式を斷ずるを得べし

社會進歩の速度は、時間に關して對數函數の關係あり、之を名づけて社會進化の對數的理法と謂ひ、此說を呼びて社會進化の力學說と謂ふ。[一二三]

[一二三] Logarithmic Law of Social Evolution 及 Dynamic Theory of Social Evolution と外評す。著者の創說なり。

今本文の理法を解說すべし。抑、社會進化の連續現象に在りて、特定の一刹那に於ける進化の速度は、實に直に此に先だつ所の刹那、卽ち事實は當該の刹那に於ける社會進化の程度卽ち造詣によりて決定せらる、何となれば、社會進化は、特定の時限に就いて之を觀れば、文明其者に外ならずして、乃ち社會の自個に由る實現に外ならず、社會進化を成すものは、實に社會進化其者に外ならざればなり。且進歩や、進化や、是れ動學的事項にして、之が變化を表言するに速度の名目を以てするは、尤も適當とせざるべからず。速度は特定の廣袤を有する時間に於ける進歩と其時間との比なり、一刹那の長さ、卽ち微分時間に於ける微分進歩と、其微分時間との比は、卽ち此刹那に於ける進歩の

速度にして、此速度を規定するものは、太初より此刹那までに達せられたる進歩の造詣、卽ち當該刹那の時點に於ける社會進歩の程度是なり。之を數學上の名目を以て表言すれば、特定の刹那に於ける進歩の速度は、當該刹那に於ける進歩の程度と函數的關係ありといふこととなる。今時間をTとし、進歩をEとすれば、微分時間はdTにして、此刹那の時間に於ける進歩はdEなり、此刹那に於ける速度は$\frac{dE}{dT}$なり。是に於いて上述を表式すれば

$$\frac{dE}{dT}=f(E)$$

然るに此函數關係は、實はさまで複雜ならずして、單純なる比例的關係に外ならず、乃ち次第に左の諸式あり。

$$\frac{dE}{dT}\propto E$$

或は

$$\frac{dE}{dT}=kE$$

式中kは一の常數なり、之を次第に變化し、$K=k^{-1}$として、

$$dT=K\frac{dE}{E}$$

今Tに關して積分すること左の如し。

$$\int dT=\int K\frac{dE}{E}$$

卽ち　$T=K\log E+C$

此結果は、恰も通俗にマルサスの人口論、フェヒネルの刺戟と感覺との關係論等に謂ふ所の、數理級數幾何級數の關係に該當す。T卽ち時間が數理級數的に增減するに隨うて、E卽ち進歩は幾何級數的に增減するの關係は此式乃ち之を表明す。是れ恰も曩に社會進化の六大根本理法の隨一として立說する所の加速度の理法の尤も根本的の發現たるなり。[一一四]

本著第二卷社會理學第二篇第二章及本卷第一篇第二章。

此理法より、直に推論として出で來るは、社會進化の無結局なること、及社會進化の非週期的なること、なり。

如何となれば、社會進化を一面、進歩の方面より表現する對數曲線は、無限曲線なり、非週期曲線なればなり。[一一五]

是故に、文明の浮沈波瀾は、畢竟社會進化の大江の表面に於ける小やかなる激灩たるに過きず、此間に活動する

是れ本卷第一篇第一章第二節の所論と適に相應ず。

個人の事業は、恰も猶泡沫の且消え且結びて暫くも住まることなきが如きなり。然れども、文明の觀る可きなくんば何ぞ社會の進歩に在らむや。乃ち文明の目的は社會進化を成すに在り、と謂ふと同時に、社會進化に意義を供ふるものは文明是なり、と謂ふ可し、社會進化と文明とは、實に相互に目的たり、唯甲は乙の形式的目的たり、乙は寧ろ甲の實質的目的たり、とすべきもの。社會進化の實質を繹ぬるや、必ず文明の尋繹に歸趣するは、是れ文明の意義を直に宇宙の大局に交繫せしむる所以なり。

文明は力なり。社會進化は、文明よりも、更に一段の深き意義、廣き永き存立を有する所の事象にして、卽ち彼の力に對して、應にエネルギイの地位を占むべきの事項たり。

然り、社會進化の奥底にはエネルギイあり、社會進化は一の大なる仕事なり、宇宙進化といふ宇宙の總仕事の一の大なる部局なり、否、その最高最大なる一部局なり。社會進化に於いて發現する所のエネルギイは、宇宙エネルギイ其者に外ならざるも、唯其尤も進める、尤も高き發現たるに於いて、一切の宇宙的動學的現象に冠絶す、之を名づけて社會的エネルギイといふべく、而して文明や實に其一種の發動たる力に外ならざるを了すべきなり。

第二章　社會進化の史觀

第一節　緒論

社會進化の史觀は、世界の歴史が提供する主なる社會の發達の歴程につきて、社會の進化と人間の發展との大勢を觀察し、文明開展の素地を大觀せむと疑する者なり。

社會進化の史觀は、三重の意義を有す。一般に社會學の研究に於いて、社會進化の渾一具體的事實の徴驗を社會進化の理論に提供すること其一なり。文明の研究に於いて、社會の歴程を明にし文明の由來を詳にするの素地を

成すこと其二なり。是を以て又現代文明の性質の攻究の爲に、此考察や實に其成分の由來を語り、其活ける役者の實歴を語るの效益と成す、是れ其三に數ふるを妨けず、文明理論の考究を次いで文明開展の素地の大觀は、實に如上の重要なる意義と使命とを有す。

社會進化に於ける斯かる徴驗の價値の幾許なるかは、最も注意を要す。世の學者、往往深く思ひ明に辯ずることなくして、事實的徴驗は如何なる場合にも如何なる事物にも均等の價値ありと思惟する、大なる誤謬なり。事實的徴驗の價値は、最も其與件の數に關繫す。是故に物理、化學の如き、實驗の容易なる學科に在りては、此數や學者の勤勉によりて殆ど際限なく增加するを得。且是等の學や、所謂經驗、卽ち自然に起り來る事實の捕捉觀察、其機會に乏しからずして、此重要なる與件の數は極めて大なるを致し、隨うて事實徴驗の學術上研究に與ふる價値の甚だ大なるが爲に、此等の學は、或は實驗的科學の名目を

さへ受けたれども、社會學の取扱事項に至りては乃ち然らず、而も個個の社會現象を別別に取扱ふときは、亦猶多少其與件の數の數ふるに足るあるを期すべきも、社會進化は普遍の最も普遍なる社會現象にして其究竟に至りては全世界を通じて唯一個の事例を供するに過ぎず、與件の數の斯く限らるるが爲に、事實徵驗の此研究に於ける價値は極めて小にして、此研究の、物理、化學、等に反して、殆ど純然たる理論的、卽ち演繹的學理たるに過ぎざるの觀あるは、亦已むを得ざる所に屬す。

然れども、既に此價値の限界を詳にして以て事實の觀察を行ふときは、事實觀察や亦實に學問上大なる補助を致す者とす。殊に物理、化學の如き、其個個の學理は甚だ單簡なる事項に繫れども、社會現象就中社會進化の事項は複雜の極を以て目すべき者なるが故に、抽象的議論を旨とする理論的研究は、更に其合成を以て複雜なる全體に應ぜむを企つるも、到底實地其者に適應するの完全を期し難し。是れ文明史の重要なる所以、社會進化の事實に於ける、與件の數の極めて小なると相關係して、事實の內容の極めて複雜なるは、乃ち事實觀察を重要とする原因たり。

從來社會進化の史觀を成し、文明興亡の蹤迹を尋ぬるものの尤も數陷りし所の弊凡そ二。第一に、其觀察の方面に於いて自ら限局し、遂に其大局を通觀し得ざるもの、是れ政治史、文明史、哲學史、美術史等の學者が冒しし所の過失にして、斯の如きは未だ社會進化、文明興亡の史觀の企を以て目す可きにあらざるなり。第二に、觀察の範圍の限局あるもの、是れ東西の交通未た甚た盛ならざりしに於いて免れ難き所なるも、今日に於いて猶往往、歐西の學者の歐西以外の事實觀察の價値を蔑視するあるは、是れ眼前の針頭を以て萬里の泰山を沒せむとするの陋見のみ

唯今日確に且正しき史實の提供する所を以てするも、猶往古埃及の興亡墨是哥秘露の昔日の文化の如き、未だ大に詳なる能はざるものあり。史的渾一體としての印度社會の如き、亦此類に漏れず。故に吾人は、觀察範圍の廣挾に於いては、東洋の事象に通ずるに於いて歐西學者に比して一日の長あり。吾人は今學界に在りて得能ふたけの手段を悉して觀察の範圍を擴うするの責務あり。範圍既に廣し、全局は唯一あるのみ、乃ち偏局を以て全局と誤認するを免るるに庶幾からむか。

全局は唯一なり、何となれば社會文明の興亡の史觀は、世界歷史を與件とする大觀なればなり。

遮莫之を簡明に敍述して、所謂大觀の任務を完うせむは、眞個に一大難事に屬す。今や一種の新樣式を用ゐて、聊か敍述を試みざるべからず。

人は單獨にては人間とならず。人は單獨にて存立する[1]を得ざるを以て、人は必ず人間たるの運命を先天的に具有す。唯人間の範圍及規模には幾多の差等あり、親たる人と子たる人とを以て組成する人間より、施いては竟に世界總體を以てする人間に及ぶ。這般狹隘小規模なる人間より、廣遠大規模なる人間に至る、卽ち人間の發展[2]と謂ふ所のものにして、人間の始源より以て今日に至る、人間歷史の經線を成し、其樞軸を供す。人間の發展の要項二あり、人口の增殖其一なり。交通の開展其二なり。

地域の擴大、亦第二位の價値に於いて人間發達の第三要素に數へられざるに非ざるも、歷史を按ずるに、人類擴布の地域は、凡そ史傳の最舊時より、既に世界の各地に擴がりて、史傳ありてより以降、人間發展の須要事は、人類の一層汎き一層行き亘れる擴布、卽ち地域の擴大よりも、寧ろ數層の重要を交通の發達卽ち既存の人類相互の連絡に

1 Humanity と外譯す。

2 Development of Humanity と外譯するを妨げず。

存するを致せり。

人間は社會なり、社會には文明あり、其程度、其品數、幾多の差等あり、人間の發展に於いて主として注目考察を値するは、就中文明社會なるが、今や一般に史迹に於ける人間社會文明の興亡を尋繹せむとする、亦直に文明社會について研尋する所あるを要す。

第二節　社會進化の大勢

今日に於いて、全世界は、大なる意味に於いて一大社會を成すに進めり、今日より以降、全世界は宜く一大渾一社會としての取扱を受くべきに至れるものなり。

然れども、斯の如きは眞に近時僅に啓かれたる狀勢のみ、現時に於いても此狀勢や尙其發端の時期に在るに過ぎずして、未だ俄に全世界を以て完全なる渾一社會を成し了せりと謂ふ可きに非ず。回顧すれば、第十九世紀の後半に至るまでは、歐人の東洋を知ること恰も猶フエアリイ・テエルス中の民族を見るが如く、東洋の西洋を想像すること亦未だ夢想兵衞の遊歷せる國國にも及ばざりしなり、然れども、第十九世紀に在りて、世界はともかくも、既に東西二洋の相知らざる區域たるまでに進めり。第十六世紀の初を回看せむか、東西兩半球は全然相互を知ることなくして經過せり。時代を溯るに隨うて斯の如く、之を概言するに、世界の各處、各個互に相知らず相關せざる衆小社會の駢立割據より世界、人間の歷史は始まりて、遂に世界全般を以て一大社會を構成しつつある今日の現狀に至れるものと謂ふ可きなり。[三]

是故に最も嚴肅に之を謂へば、眞正の世界歷史[四]といふべきものは今日以降に於いて始まる者と謂はざる可からず、如何となれば、今日以前には唯地學上の世界ありて、何等歷史上の世界なかりければなり。從來存立する世界歷史は、其尤も完全なるものを以てするも、之を世界の歷史[五]とは謂ふ可きも、世界人間に於いて起れる凡百の現象に就いて相互に因緣以上の關係を有する衆多事實の渾一的觀察及敍

三 Gur plowicz: Rassenkampf. II. Polygenismus III Ursprüngliche Vielheit der Sprache und Culte 亦參照に足る。

四 Universal History.

五 World's History.

述たること能はずして、到底人間世界の一部分を成せる衆小社會の歴史といふに過ぎざりしなり。蓋し所謂世界其者が、未だ一個渾一的歴史の對象となり得可きまでに進まざりしや、嚴肅なる意義に於ける世界歴史といふものの存せむやうなし、夫れ今日に於いて全世界歴史の名目の下に學問體系の一角を占めむと期する所の學は、必ず此嚴肅なる意義に於けるものならざる可からず。而して從來の所謂世界歴史や、唯教育的意味を有するのみ、彼等は唯今日世界と謂ふ一大社會の構成に至るまでに、その編者の自個所屬の國、所屬の民族、所屬の人種が經來り閲し來れる、史的事實の總覽に名づけたるものに過ぎず、其自個の國民、民族、人種、を以て、世界の中心と做して觀するに於いて、正に教育的意義を有すとすべし。教育的意義に於いて正當なるも、學問上此の如きものを以て世界歴史と號するあるか、愚に非ざれば則ち狂なり、而して是れ歐西多數の學徒が靦然として冒して恥ぢざる所、殊に最も笑ふ可きは、外邦の學徒が更に復其誕を樂み、異邦の學者が其自個を中心として世界を觀せるよりの所產たる這般の世界歴史を直に取りて以てわが世界歴史とすることにして、此の如きは、之を教育的意義とせば他人に飲食を依賴するの類と謂ふ可く、之を學問的意義とせば其取る可からざること歐西學徒の過を軼ぐるの更に數等なるものと謂はざる可からず。

夫れ社會進化の大勢に在りて尤も先づ刮目に値する第一項は、人間社會が互に相關繫せざる個個の衆小社會より、遂に一切の人間を以て結成する一大社會に向うて進むこと卽ち是なり、と謂ふ可し。斯かる趨勢の長程を實歴し來れるが卽ち我地球上人間社會の歴史なるが故に、今や社會進化、文明興亡の史觀は、勢ひ此離れ離れなる個個の衆小社會に就いて別別に觀察するに始まるを要す。

人間の始源より降りて自覺的社會文明を有する社會生活の考察に入る、其間幾萬の年所を經るも、自覺的社會生活の未だ發達せざる

や、遂に事蹟の茫漠を免るること能はず、此間に於ける各小社會の相互關係は、上來述べたる所を以て想定に擬すべく、各小社會の內的變遷發達は、一般に社會の發生及體制の發達の攻究の結果として擧がり來る所のものを以て此に擬せざる可からず。此一連の連鎖を徑路とするは、人間の歷程を終始して闕漏なく、卽ち社會進化を直に生物進化に連續せしめて鴻溝を生ぜざる所以なりとす。

抑、第十九世紀の後半に馴致せる、人間世界の歷史を成すに參與せる衆社會に在りても、亦連續して以て今日に至れるものあり又全く然らざるものあり。此處に謂ふ所の連續とは、其社會の因緣以上の關係が今日の世界卽ち渾一大社會の歷史に及ぼすことの謂なり、故に連續存立せざる社會と雖も、其興亡隆替の史迹にして昭昭たるに於いては、固より社會進化の史觀を成すに大切なれども、不幸にして是等は多くは斯かる充實せる歷史の知識を吾人に遺さず、西大陸發見の以前に於いて興亡隆替せる墨是哥及秘露の歷史は、遺憾ながら其精しきに於いて吾人の手裏に來らず、埃及及亞西利亞の舊き歷史も、亦今此取扱を試むるまでに充分なる與件を供せざるなり。其他其名をだに知られざる、卽ち遺さざる、幾多社會の興亡隆替も、或は之有りけむを、今皆人間の學問的識域以下に沈降せるは、惜む可く又憾む可し、支那の以前、埃及の以前の如き、亦未だ全く多少の開化を有せる社會なかりしの確證あるを得ず、是故に今や取扱に上り來るべき世界の史前史に於ける個個の社會は、之を要するに、東洋の社會及西洋の社會、卽ち此二あるのみ。且此二社會は、互角の駢馳を過去の數十世紀を通じて成し來り、各其社會の進化を成し、文明の興亡を呈せり。今や歷史の此二大流域に沿うて觀察を下すの必要と利便とを見るなり。

東洋に於いて自覺的以上に達せる社會を求むれば、支那印度及日本の三者なり、就中東洋と西亞との中間に位し、而も其文明の關係に於いては寧ろ東洋の一大社會、寧ろ衆多社會の群として擧ぐべきものに印度あり。印度は其整然たる哲學思想の一大體系を人間世に贈遺せるの外、其社會的歷史的生活に至りては、多く斷片的知識の傳はるのみ、連續せる體系的知識は遂に之を世に遺さざりしなり、乃ち印

度民族の生活は、眞に超絶的なり、所謂宗教的哲學的生活の純粹なものなり、是故に其社會について發達といひ進化と稱す可きは、唯其思想的生活の上に在りて、實地生活に就いて見れば、婆羅門教、吠陀の時代も、商羯羅阿闍梨、乃至チュブレイ、グライヴ、ヘスチングスの時代も、幾と變遷發達の釋ぬ可きなし。社會進化の發達觀より、印度人民の生活は、之を除き去るも大なる損失なしとする所以なり。而して其末は唯印度人あるも而も印度國なく、三億の生靈、空しく十萬の英人の羈阨の下に呻唸し饑渇するの慘況に陷るを致せるなり。されば東洋に於いて最も觀察を要するは支那及日本の二國ありとするのみ。

東洋に於ける二國は、亦中頃にして相交通するに至れるも、其社會の內的發達の進路は則ち截然たる別途を趁ひ、其相互の關係は、則ち時に或は平和的に、時に或は戰爭に於いて相觸接せる所ありしに過ぎず。斯く兩樣別途の進路を取れる兩個の社會は、須く節を分ちて仔細に考察せらるべきものとす。

第三節　日本社會の發達

日本の社會は、宇內の學術界に與ふるに、發達せる族制社會の唯一の完全なる標本を以てす。

抑、日本の社會、その進みて自覺的發達の境地に入れるは天孫降臨の時期に在り。當時已に社會の首長卽ち天神に隨從せる者は後世神別の遠祖を成す、是等は社會の始原に於いて既に主從の關係に於けりし者にして、其數も格別多からず、亦異人種若くは被征服者たるが爲に臣隸となれる者にあらず。神別族を除くの外は皆皇別族にして、悉く天神の家族の分岐に出でざるはなし。斯の如き自然の素地の上に國社會は建てられ、社會の首長は家族の

六　皇別神別及蕃別の事は後段の大注に再說す。神別必ずしも天神の裔にあるもあるに注意するを要す。

長たり、特に教育宗教の先覺者たるが爲に、一般人群中同列の一人が崛起して先導となれるにあらず。我上古社會の組織を稽ふるに、國は實に家の複雜なるもの、卽ち自然社會より人意社會に進み移るに於いて最も順當の徑路たる、族制組織の一大社會に於いて、皇室の全社會に君臨するは亦猶親の個家に於けるが如く、親子の關係やがて君民の關係となれるもの、是れ日本社會の本有する所たりしなり。

本文の斷案は、是れ實に建國の基礎、國體の倚據、而して社會進化の本流、主波たり、今少しく詳に之を說述するなかる可からず。

夫れ一家組織の要素は親子にして、子一人以上なるときは之を同胞と稱す。我上古の國家は恰も此關係の體系に過ぎざりき、卽ち社會の各成員の間には親子と同胞との二樣の關係ありしのみ。但し此處に成員といへる個體は、個人よりも寧ろ個家なりとす。凡そ個家にして互に同胞の關係ある者數個の一組を名づけて部曲[七]といひ、民部[かきべ]といひ、品部[しなべ]といふ、是等の部曲は、卽ち高等の一家にして、[八]これが親たるものを氏上若くは氏長者[ん]といひ、此高等の家を氏といふ。氏は內を意味し、又[一〇]同じ生血を意味し、同じ血族に屬し同じ血統より來るを意味す。卽ち氏や、形式に於いてのみならず、血緣の關係に於いて實に族の性質を具すること明なり。

氏に大氏あり、小氏あり。大氏の小氏に於けるは、小氏の個家に於けるが如し。斯くて一般に更に氏の上に立ちて、これが親たる關係あるものあり、是れ卽ち姓、又骨なりとす。姓は迦婆稱と訓ず、株根の義なり。[一二]而して諸の姓を以て同胞兄弟の關係と爲し、更にこれが親たる地位に在るものは皇室なり。

故に今上古の日本社會の組織を圖表するときは正に一種の體統を加味せる體系を得べし。[一三]

概觀則ち此の如し。氏を總ふるの親、卽ち姓あるものを總稱して百

七　部曲に屬するものは賤民なりといふ說あり。此賤民の何處より來りし何人種なるかは、明せざる限り、學說とならず。かく多くの賤民の由來を立つる說せむは難事といふべし。久米邦武氏は北人種の中より拔擢せられたるものの之を成せりと充分なれども、宮崎道三郎氏の部曲考、頗る詳なる說明を出だせり。

八　メイシの父權說に、他より入るが如く、家長の配下に立つもの、同隨の奴僕隸屬なるもの、附隨しもあり、論せるもの。此附隨者を勿論以て部曲と譯す。部曲本部なる部曲に要する差を認せざれば、是れ國體に大に生ずる基を成す。

九　但し是等の稱呼は中古時代よりの事なり。平田篤胤は氏を以て同し內に屬するを意味すと解せり。

一〇　多くの他の學者は皆氏は生血、うみぢなる意味し、また生統うみすぢの義なりとす。うみすぢは語義復雜に過ぐるも、大要うみぢと同義に歸す。

一一　姓は天皇より賜へる榮稱なりといふ說あり。眞淵の說なりき。是れ如の說なり。以て姓の自然的榮稱なりとす。株根の意味も由來また株根の義に矛盾すべし。但し骨、姓いずれも充てず字なること勿論なり。

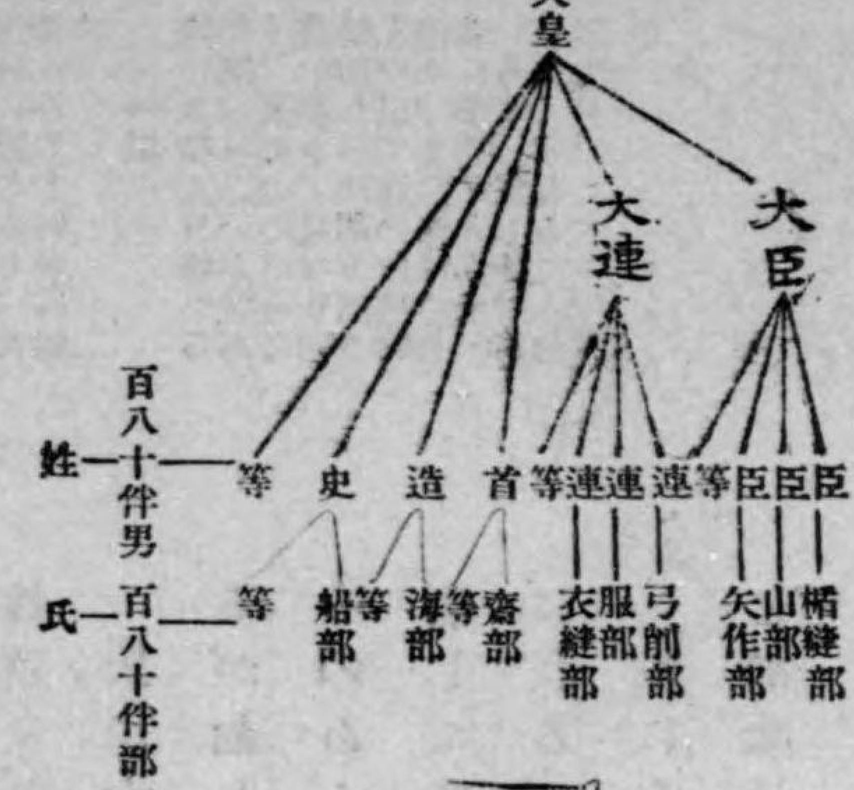
一二　

八十伴男といひ、家を總ふるの親、即ち氏あるものを百八十伴部といふ、部は牟禮[14]なり、群なり。百八十伴男の中尤も勢力あるものは、臣、連にして、多く都[15]に居住せり。されば他の百八十伴男は、實地には臣、連の統轄を受くるの狀なり。臣連の姓の中、更にその首長に該るものを大臣大連と爲す。

斯の如く各級の關係は、實際に於いて血族親子の關係にして、其親たる地位の者が子たる地位の者に對する權能、亦全く此親子の關係に外ならず、保護統制の權能の百八十伴男に存するは、全く親に存するが如き性質に於いてす。是故に其最大、最高、最上なる皇室の全社會に君臨するは亦猶親の個家に於けるに外ならずとす。

且此制度に於いて尤も其簡易に留心すべきは、此雜多の百八十伴男が各其伴部を率ゐて社會運營に樞要なる各般の業務に從事するに在り。即ち我上古の氏族制度に

一三



一四　社會學上の群にはあらず、唯牟禮に常用の漢字を配せるのみ。

一五　都は「みやこ」なり、宮處「みやところ」なり、宮は「みや」なり、御家なり、天皇の御住居なり、都は天皇の住居せさせたまふ處の地なり。即ち帝都なり。

在りて、氏姓はやがて職官なりしこと、是れ實に此制度の特色なりとす。臣、連、造、別、君、直、等の諸姓に於いて、臣連尤も國家大政の樞機[16]に參じたれば、其權勢の較、大なりしは自然なり。既に氏姓即ち職官なりしを以て、門閥世襲は行はれざる[17]べからず。

以上は有史以後の國狀について記述せるものなり。其深く我國家社會の根柢に根さし、即ち原始以降此方向を有する社會進動を成せりとするの憑據たる事實を列擧すべし。

第一、祭祀の重んぜられしこと、天皇は天神の子孫にして、祖先たる天神を祭るは即ち日本祭祀の基と爲れるなり。祭祀の重んぜられしや、祭は即ち政なり、政事をまつりごとと謂ふも、之が爲なり。天皇の政治を爲すは、やがて天祖に對する所以にして、事事必ず之を天祖に告ぐ。[18]夫れ祭祀の重んぜらるるは、即ち祖先の重んぜらるるなり、祭政の一致なるは、即ち家事と國事との一致なり。是故に、我族制の直に原始より起り來たるものなるを知るべし。

第二、系圖の貴ばれしこと。系圖の尊重は、我國古來の風俗の一なり。

一六　楯縫部は楯を縫ひ、山部は山林を守り、弓削部は弓を作るの類なり。

一七　或は疑問を下して謂はむ、全國是れ一家にして、皇室之を總統すといふが爲には、皇室の支家以外に、家は一も日本社會に之有るべからず、而も事實は則ち之に反するに似たりと。然り、嵯峨天皇の弘仁五年、紀元一四七四年、姓氏錄成り、始めて神別皇別蕃別の稱を立つ、此によりて觀るときは、蕃別は我皇室の支族に非ず、神別中亦必ずしも然らざるものあり。然りと雖も、是れ決して族制社會の氏族制度を害するものにあらず、彼等既に百八十伴男若くは百八十伴部の中に入る、是れ自ら好みて子の地位に入れるもの、亦猶養子の制が家族の成立を妨げざると一般、建國の根本は依然として族制的たるを失はざるなり。

允恭天皇の時、紀元一〇七五年、諸〻の氏人、或は誤りて己の氏族を失ひ、或は故らに貴族を冒すものありしかば、探湯以て詐冒を正すの事あり。降りて源平爭鬪の時代に至り、鬪戰の際、先づ氏文呼ばりを爲すの風あり、亦是れ族制に特有なる一事象なり。

第三、御子代、御名代、屯倉の制ありしこと。御名代の淵源は須佐之男命に在り。[一九]御子代の正史に見ゆるは垂仁紀に始まり、[二〇]屯倉は繼體天皇の時に始まる。[二一]是等は皆追遠紀本の至情に出で、族制の特象の一として見るべきものなり。

第四、氏の名は職掌住處功業より命じたること。氏を命ずることは、神代に天宇受賣命に猿女氏を賜ふに始まる。海部、山部、弓削部の如きは職掌よりせるもの、宇陀氏、葛城氏、蘇我氏の如きは住處よりせるもの、境部、治田、神門の如きは功業よりせるものの例なり。以て族制の性質を察すべし。

第五、氏族間の爭は國史を通ずる一大現象なること。是れ尤も氏族の觀念が我國民に根さすの深きを徵するに足るもの。皇別なる武內宿禰は、其先孝元天皇より出で、始めて棟梁大臣となり、葛城、許勢、蘇我等これより出でて、代代大臣と爲り、大久米命の後なる大伴氏、建甕槌命の後なる物部氏は、神別を以て代代大連と爲りき。佛敎に關する爭議によりて、大連神別は滅亡したれども、中臣氏更に神別を以て起りて蘇我氏を亡ぼし、爾來數百年、藤氏榮え、而も遂に之に代りしは皇別なる平氏なり、卽ち我國史には、一種著しき系圖的爭鬪の暗に絕えざるを見るべし、是れ實に國史上族制の意味を明表するものとす。

日本社會の族制組織の成立及憑據は略〻上述を以て明確なりとす、乃ち知る皇室は實に日本萬民の親なり、我國家の元首なり、唯日本に於いて國を國家と謂ひて家の字を加へ呼ぶの始めて大に當るものあるを、今更に日本皇位の本源的性質を述べて、一層此特色ある社會組織を明確にすべし。

日本の皇位は、古之を天日嗣の高御座の御業といへり。[二三]宣命を熟讀するときは、啻に天日嗣の高御座の御業の義の明瞭なるのみならず、所謂百官人等、天下公民の地位亦太た明なり。而して是れ實に歷代卽

一八　近く憲法發布、征清征露、開戰講和の如き、皆此典を擧げられき。

一九　出雲風土記、飯石郡須佐郷の條にいふ、神須佐能袁命詔、此國者雖二小國一、國處在、故我名者非レ着二木石一、詔而、卽已命之御魂鎭置給之處、然而大須佐田、小須佐田定給、故云二須佐一。同書またいふ。出雲郡健部郷、所二以號一健部者、纒向檜代宮御字天皇、勅不レ忘二朕御子倭健命之御名一、健部定給、卽健部臣等自レ古至レ今稱居二此處一、故云二健部一。

二〇　次伊登志和氣王者、因レ無二子而爲一子代一、定二伊登志郡一とあり。

二一　春日皇女の名を爲代に表さむが爲に恒布屯倉を賜へる事これなり。

二二　日本書記神武天皇巳未年の條に、三月辛酉の朔、下卯の日の下令に云ふ、恭隱二寶位一、以鎭二元元一、上則答二乾靈一、之德、下則弘二皇孫一正之心、然後兼二六合一以開レ都掩二八紘一而爲レ宇、不亦可乎。此處に寶位といふは、天日嗣の漢譯にして、乾靈は天神の漢譯なり。

位の時、古來每に用ゐ來たる所にして、天孫降臨以來我皇室に傳はり、今に至りて猶存するものなり。

茲に更に天孫降臨の性質を明にするを要す。天照大御神之命以、豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知國、言因賜而、天降也（シタマヒキ）と記す。所謂高天原國は從來純ら天神の所知し國にして、水穗國は當時事實上大國主命の統治せし處なり。大國主命は、天照大御神の弟なる須佐之男命の末裔にして、初め須佐之男命の此國を經理するや、流竄の餘に出づ、則ち此國が天孫の所知すべき國なりしことは、初より定まれりしを、年所を經るの久しき、大國主命及其一族は迷誤を重ねて、此國を自家の所知の如くに思ひ做ししなり。乃ち初は依違して命に應ぜざりしも、後には則ち豁然として悟る所あり、終に、僕者於百不足八十坰手隱而侍（ヒナム）、亦僕子等、百八十神者、卽八重事代主神爲神之御尾前而仕奉者、違神者非也と曰うて退隱するに至れり。是に由りて觀れば、天孫降臨は、征服にもあらず、併呑にもあらず、乃ち荒廢を理して舊制を復したるのみ。而して天日嗣高御座の

二三
續日本紀文武天皇卽位の宣命に、現御神（あきつみかみ）と大八島國所知天皇大命（おほきみこと）詔（のりたまはく）大命（おほきみこと）集侍皇子等王臣百官人等天下公民諸聞食（きこしめさ）と詔（のりたまはく）高天原（たかあまはら）に事始（ことはじめ）て、遠天皇祖御世（とほすめらみおやのみよ）、中今至（なかいまにいたる）まで、天皇御子之阿礼坐（あれまし）ませる神（かみ）の御子（みこ）、天都（あまつ）神（かみ）の御子（みこ）、大八島國（おほやしまくに）を、知（しら）食（めし）て、天坐（あまし）ます神（かみ）の御子隨（みこのまに）、聞食（きこしめ）せ。此天津日嗣（あまつひつぎ）高御座（たかみくら）の業（わざ）、現御神（あきつみかみ）と大八島國所知（おほやしまくにしらす）天皇大命（すめらみことのおほせ）を、諸（もろもろ）聞食（きこしめ）せと詔（のりたまはく）。

二四
古事記上卷。

二五
以上の論述に關し、前賢の述作の尤も參考すべきものに左の數種あり。
本居宣長撰古事記傳。
栗田寛撰大日本氏族傳。
志。伊千廣撰選美大勢
三轉史論。井君撰
小中村義撰。
度通。
撰制度通。
撰伊藤長胤
撰荻野由之
日本制度通。

業とは、卽ち彼が如き性質を以て斯國に君臨することの謂なり。二五

上來較、詳に述べ來れる所は、日本社會が本然的正徑的に取り來れる歷史的樣式なり。史家或は此時代を呼びて我國史に於ける氏族制度の時代といひ以て後の職官制度、武名制度の時代に對す、當れりとすべし。

日本社會組織に於ける族制主義は恆久性を有す。此主義は理なり、而も勢は必ずしも常に此に伴ひ此に應せず、社會の進程に於いて亦主波と副波とあり、是に於いて後世歷史の變象乃ち生す。

建國創業の大功茲に成り、日本の國土に於いて一地域を占領し、秩然たる制度を備へ、鞏固なる體制を有せる一國社會の茲に生り出でたるに於いて、他の此に對抗するに足るの秩然たる社會組織を有せざる各地方は、曖昧の

裏に全部これが從屬に歸するの勢ありしが、其明確に組織的に從屬の實を擧ぐるに進みしは、崇神景行の東征西伐に於いて小成せり。蓋し草創の世、交通の不便なると、僻陬の地の未だ成形的社會を見るに至らざるとは、毫も特に之に向うて征伐を加ふるの要を見さざりしが、今や漸く時運は此要を見すに至れるもの、而して此事功は、神功の海を渡りて三韓を征服するに至りて了れり。抑此く曖昧混沌のままに幾多の年所を經過し、社會の自然的發達の機運を待ちて適當に成熟せる按排の功を擧くるを得たるは、亦實に日本の海島に據れる社會たりしに由らずんばあらず。而して日本社會民族の發展が紆餘曲折嶮峻苦楚の途を趁はさりしこと亦此に因す。

斯くて社會の地域大に擴まり、更に幾多の年所を經るや、山岳の起伏し、島嶼の群立し、全國幾多小地域の集成の觀ある日本の國土に在りては、一たび中央統制機關が幾分の弛態を呈するある、所在個個の小社會に分化するは勢の免れざる所。此社會分化の勢を輓回して之を統一せるもの、乃ち大化の改新なりとす。大勢、卽ち社會進化の主波、實に斯の如し、更に其副波を觀察せむか。

蓋し官職の濫觴は實に太古に在りと雖も、[二六]官職や氏族制度の時代に在りては常に氏族に伴ひき。爾來制度漸く整ひ、中央には大臣大連以下の官職あり、地方には國造、縣主、稻置、村主等の職あるに至れるも、皆世襲にして、未だ曾て氏族を離れたる官職あらざりき。然るに紀元千二百年

二六　拙稿日本政體論第四六參看。

代の末に及びては、世襲土着に緣する流弊、大に起り、土地人民は貴族勳舊の私するに任せたり。[二七]

地方既に斯の如く、中央は則ち宗教問題に關する爭議に緣りて、氏族的黨禍漸く慘毒を極めむとす。積勢の究まる所、內勢既に改制を必要とするに際し、支那との交通大に開け行きたるの結果、乃ち舊制を廢して新制を布けるもの、是れ大化の改新たり。

二七　孝德紀に、臣連伴造國造、各置二己民一、恣情驅使、又割二國縣山海林野池田一以爲二己財一、爭戰不已、或兼二併數萬頃田一、或全無二容錐地一、及進調時、其臣連伴造等、先自斂、然後分進、雜馬の末造、と支那の現狀と相似たり。舊事記國造本紀に據れば、一百四十四國造あり、大抵惡の輩なれば、非ざることなかりしなり。因循推移して成し來りしに、這般の弊實を繼ぐものなり。

大化の改新を摘要するときは左の如し。

第一、地方封建世襲の制を廢して郡縣の制と爲す。

第二、御子代御名代屯倉部曲を廢す。

第三、朝廷世襲氏族の官職を廢じて八省百官を建て、左右大臣內臣の三職、百官の長として大政を執り、朝綱を振肅す。

第四、地方には新に國司郡領を置く。

第五、戶籍を修し、班田收授の法を定む。

第六、租稅法を改め、舊賦役を廢して租庸調の法と爲し、田の調、戶別の調を收む。

第七、司法制度始めて生す。

第八、婚姻、葬祭に關し、風俗上の行政を畫す。

第九、寃枉を訴ふるの道を開き、始めて言路を通ず。

第十、京畿を修め、郵驛を通ず。

以上十綱を以て大化改新の要綱と爲す、就中初三項を以て其大綱とす。

大化の改新は、社會體制の上には氏族制度を廢して職官制度を定めたる意義を有し、而して文化の上には亦特殊の重要なる意義を有せり。

是より先、三韓征服以來、支那學問文明の渡來あり、欽明天皇の十三年、更に佛敎の渡來あり、從來唯實行を有して思想の體系を有せざり

し日本社會、今は儒學によりて思想體系を有するに向ひ、從來唯現實を有して超絶を有せず、則ち天神地祇として祭祀する所の者、亦多く唯祖先を追遠するに過ぎざりしもの、今や佛教に於いて始めて超絶的信仰あるに至れり。儒學の移植は社會の進運當然の複雜を助成するに止まりしが、佛教の渡來及長成繁衍は、既に社會人心の倦怠せる時期に於いてし、乃ち其傳播と共に社會の墮落、風俗の腐敗は、互に因緣の關係に於いて現れ來れり。

且體制上より之を察するも、此改新は、當時の勢、誠に必要なりし、而も本有の族制組織や、世進み、人事亦繁を加ふるに於いて改修を要するに拘らず、其本質は到底堙沒す可からざるもの。今や大化の改新は、疾雷閃電、人の耳目を一新し積弊を一洗し了せりと雖も、其弊亦這般の本質をも併せて之を滅沒し去らむとするに存せり。

近江令！爲り、大寶令を爲り、必要なる改革事業、數世を閱して益成る則ち其未だ全く成らざるに先だちて、夙く既に氏族主義の反潮の浸浸として生じ來るを看る、大化を距ること未だ半世紀ならず、天武天皇の白鳳十二年、紀元一三四四年、更に新に八色の姓を設けて天下の萬姓を改む。[二八]固より此反潮の爲に、郡縣の制の全く廢れたるにあらず、唯氏族主義の反潮の改新主義と合體して新なる形體に於ける氏族を形成せるが此事實の意義なり。乃ち同じく姓といひ、同じく氏族と謂ふと雖も、此新なる八姓を以て天下の萬姓は混せられ、古來の迦婆彌は迹を社會に絶つに至れるものとす。

而も迦婆彌の精神、卽ち族制組織の大主義は依然として日本社會に存留し、苟くも理の明にして存する限り此主義は鬱然として興隆し、社會を無秩序的崩解的傾向より救濟するの效果を成せり。

大化改新、其統制上の成功の尤も薄弱なるは實に地方

二八　八姓は左の如し。眞人、こは壬申の亂に天武の方に功勞ありし者、守山の君以下十三人。朝臣、大三輪の君をはじめ五十二人。宿禰、大伴連以下五十二人。忌寸、大倭連以下十一人。以上を貴族とし以下道師、臣、連、稻置の四姓は較卑きもの、其數は分明ならざれども、道師は少く、臣連は其だ多かりしに似たり。

制度に在り、乃ち二百年の後、制度の動搖は地方より起り、東邊漸く多事、閫外の寄、廟堂に人無きを證し、恬熙の風、次第に專權の紈袴を侵すや、六軍の貔虎は諸國の豺狼と爲り、制符雨下して而も諸國の武士の源平二氏に屬するを禁ずる能はず、武士起り、武門起りて、天下の形勢復茲に一變し、氏族にもあらず職官にもあらず、土地人民を資とし材幹武技を力とせる、所謂名なるもの茲に社會組織の要素となるに至れり。夫れ平安政府の力の失せたるは其根原を平安人士の無氣力に寓し、平安人士の無氣力は平安種族の生理的及心理的萎靡[二九]に坐し、而して這般日本社會に於ける所在分化の勢の極まるに於いて之を統整するに成功せるを名の最大なる鎌倉幕府と爲す。

二九　同族累婚、交通範圍の狹隘、その主因たり。

元暦二年の下文は、西海の役に赴きし將士の、賴朝の奏請に由らずして朝官に任じたるを責め懲らせるもの、朝廷の實權陵弛して此極に至り、武力と土地人民の私有とを伴へる、所謂武名制度は全く茲に建てるなり。[三〇]

三〇　東鑑、同年二月十五日の條。

夫れ氏族制度の時代に在りては、國造縣主皆世襲にして、實際土地人民を統治し以て間接に皇室の統治を受く。然るに厩戸太子憲法を制定し、其第十二條に、國司國造、勿レ歛二百姓一、國非二二君一、民無二兩主一、率土兆民、以レ王爲レ主、所任官司、皆是王臣、何敢與レ公、賦歛百姓、とあるに至りては、此制度茲に破れて乃ち職官制度の時代に入る。職官制度の地方組織は郡縣ならざるべからず、然れども、所謂勢の馴致する所、地方に於いて權貴の家は多く功田、墾田、桑漆料等を因襲し、稅を上らず、返上をも爲さず、宛然として私領の勢を成す、而して郡縣の治を布ける國司の治むる地域は爲に漸く減少を致す。當時國司の任を受くるもの、亦其中央人士なるに於いて、率ね皆柔懦、自ら任地に赴くを欲せず、是に於いて、代官の制あり。豪族兼併し、地方官の令行はれず、而して天下の實權

は武名に移り、武名の總領は卽ち征夷大將軍、六十六國の總追捕使たる源頼朝たるに至れるなり。斯の如く、武名制度は封建の郡縣を蠶食せる結果にして、封建の體制茲に成り、地方制度の確立は此時に在り。社會は中央を偏重するより進みて、地方各地にも亦それ〴〵の自治は成立し、社會全般としての統制權統合力のみは、擧げて之を新成の中央政府に收めしなり。

然りと雖も、世態は斯かる變動を受けつゝ、猶古來の氏族主義は依然として其勢力を保ち、そが武名制度の社會に作用するは、正に消極及積極二樣の方針を取れり。平安の朝廷、既に其實力を失へるも、皇室及攝籙の社交上の品位は滅却せず、空名虛器、猶能く實權なき朝廷に宿りて、犯す可からざる尊嚴は則ち居然たり、是れ氏族主義の精神の消極的效果なり。武名を以て、實力を以て樹立を遂成せる人人に宿れる氏族主義の精神、是れ積極的效果なり。其一は彼等の名譽心に於ける效果[三]にして、其二は武名制度に封建世襲の性質を附與するの根基となれるもの是なり。

三　門閥系圖の尊重、氏文呼はりとなりて發現す

斯く大勢三變して武名制度の世に至り、皇室は名實共在の美を失へり。這般複雜なる事象に於いて、常變の辨識尤も切要なり。皇室の猶犯す可からざる高地に在るは常なり、其虛器を擁して實權なきは變なり、幕府が人民を統治するは常なり、其朝廷に對するの實權は變なり。

大化の改新は文敎の興隆を成せるも、首府の朝廷に偏して地方に洽きこと能はず。乃ち中央の文敎は中央統制の衰頽と共に衰頽に赴き、地方の中心代りて全社會の中心となれる鎌倉時代には、文敎の盛

は甚だ希望すべからず、其主なる者は、僅に佛教に賴りて維がる、封建武士と宗教心とは多少の關係なきにあらず、元寇と日蓮との關係は佛教の爲に一中興の時期を劃せり。

封建の體制の瓦解は中央統整の權力の衰廢に由る。源氏其柄を失ひ、北條氏之を得て能く其常事を成し、民を治むる其宜を得、高時之を失うて南朝の天子之を得ることの能はず、鎌倉中心の社會、また容易に京都中心に變轉す可きに非ずして、南北一統、次いで足利氏に由れる分化の趨勢の中止は唯皮相に止まり、北條氏の末葉以來漸く勢を成せる分化は駸駸として進み來り、[三]應仁の大亂、中央統整の實權復能く爲すに足るものなきを表白して、天下は戰國の慘況に陷り、日本社會の分化は茲に事實となり了し、

三　之を京師に見れば室町の三管四職より次第に降りて三好松永の輩に及び、關東に見れば鎌倉の管領より施いて長尾伊勢の徒に及ぶ。

僅に覇府によりて一脈の命運を繫ける文教は、亦覇府の瓦解と共に全く地を掃ひ、海内暗黑の域に陷れり。

而して撥亂反正、これが統整は織田、上杉、武田、北條、毛利等に小成し、豐臣に大成して統一僅に復し、德川に至りて其業茲に完し。各地雄傑競ひ起りて次第に小豪を統合し、雄族更に豐德二氏によりて統合せられ、封建組織秩序として定まり、各地は各地の自治を有し、統一の大權は全然中央覇府の手裏に歸し、而して德川三百年の泰平は成れり。彼文教の事、經濟の事の如きも、各地方の自治と中央の權力とによりて盛に地方と中央とに起り、封建組織の完全なる社會茲に其大成を告げたり。然りと雖も常變の關係正に賴朝の時に同じくして、日本社會體制の本然的傾

向は、遂に第三の改新を需要するの已むを得ざるを示し、堅確なる江戸幕府の社會組織に於いて、夙く已に稍稍として其勢を成し、彼大化の當時に於けるが如く、若し夫れ内外相應するの勢を得ば、乃ち大に破裂し來らむとするの力を養へり。

從來日本の對外關係は三韓との交渉に始まるも、三韓征服は對外に非ずして實は附庸關係のみ、隋唐との交通に於いて始めて對外關係あり、其善美にして和平なる、其效果唯兩國社會の福祉を增進し、社會間の慘劇は夢想にも之わらざりき[三三]其後蒙古の事あり、我之を一擊して、彼復た我を窺はず。始皇煬帝の地位に在りし豐公の征韓は、有餘の士氣を外に發して實果の擧ぐ可きなきに了り、而して漢土との關係は殆ど茲に終を告ぐ。當時西人漸く盛に、彼宗教を以て人の民を賊し人の國を奪ふの策略、以て我に臨む、我は自衛の義を完うして之を膺懲す。其極德川氏の鎖國政策となり、航海の術既に盛に開け、西海南洋復た昔日の嶮路に非ざるの時に當りて、强ひて對外關係を遮斷せしが、自ら塞ぐ者は竟に四圍に後る、乃ち二百年の後西力の大に東漸して、滔滔の勢河を決するに似たる者ありしは、固より其所なりし。

[三三] Rasenkampf.（殊に三三〇―三四五丁）の著者ケムプロキツなしく之を知らしめば、それ將た何等の語を出だすべき。

封建組織、德川氏に至りて完全せるも、一個の根本的弱點は、恒久に京都朝廷と覇府との關係に存せり。果然覇府が内外の憂患に攻めらるるに際し、翕然として起りし全般的社會的問題は卽ち是なりき。征長の一戰、覇府の兵權を銷盡し、王政維新乃ち臻る。是に於いて封建組織は覆され、一層鞏固なる體制を有する王政の復古となり、此國社會の本有なる族制組織は、復たひ王室と臣民との關係に於いて社會組織の根蔕たる效力を現し來れり。蓋し大化より以來、社會成分の次第に複雜と發達とを加へたるが

爲に、建國の本體たる族制主義は、今や全く第二流以下の諸級に其形體を求むること能はさるに至り、獨り我不易不可犯の皇室に於いて、其主義、其精神の焦點を求むるの實狀となれり。

王政維新の大業、其要綱を約すれば左の如し。

第一、統治の大權皇室に復歸せること。

第二、政府と國民との關係よりも、寧ろ政府と皇室との關係に於いて革新の要綱は存せること。

第三、公議輿論は政治上の一大勢となるに至れること。

第四、開國通交に至れること。

第五、制度文物凡へて知識を世界に求むるの主義より成れること。

而して凡そ是等の實現の爲に缺く可からざる必然的效果として左の二類の現象を表す。

第一、封建制度の廢滅。社會の事物の複雜繁多を加へたる、到底世襲官職を容すべきに非ず、廢藩置縣の避く可からざりし所以なり。

第二、氏族的精神は全く皇室に聚中し、其以外には華族に於いて僅に形式の殘遺を見るに至れること、而して職官の制は維新に於いて大に起り、氏族的職官假にかく言ふを得とせば、は唯皇室に於いて之を見るのみ。

夫れ王政維新を致せるものは對外關係と王覇關係との兩種難問なりき。王覇問題の解釋は王政復古に於いて成り、而して對外問題の時期茲に至り、日本社會は乃ち以て世界歷史の初程に上れり。

日本社會の發達を約して表示すれば左の如し。

(壹)創始時代、純族制的　神武以來

第一期、創業　神武以來

第二期、版圖の整理　崇神以來

(甲)統整期、現實的　雄略の交に至る

(乙)分化期、超絶的　安閑宣化以降

(貳)小成時代、族制兼統制　大化以來

第一期、法制組織　大化以來

第一小期、純法制的、獨斷的　大化

第二小期、半法制的、批評的　天武以降

(甲)統合期、外交　奈良、平安初期

(乙)分化期、內顧　平安

第二期、封建組織　鎌倉以降

第一小期、封建の小成、教化の衰頽　鎌倉以降

(甲)統合期、教化保維　鎌倉

(乙)分化期、教化廢絶　室町

第二小期、封建の大成、教の興隆　德川氏

(甲)統合期、鎖國　初葉

(乙)分化期、對外　晩葉

(參)大成時代、族制的統制　明治以降

第一小期、王政復古、獨斷的

第二小期、立憲、批評的

第四節　支那社會の發達

支那の歷史は約六千年前に遡るを得可し。此國の社會は群より起れる發達を成し、其首長は主として教育の先覺者たりしを特色とす。蓋し黃河南北の地、地勢平衍、地味頗る肥沃にして夙に人類の群棲あり、而して斯かる群を一家族の發達せる者と看做す可き憑據は、今に於いて之有ることなし。且其相互に戰鬪攻伐せるの事實も亦甚だ稀にして、其首長は殆ど軍事的首長たるの形相を有せず。特に討伐征服の結果此群棲を致ししに非ざるを斷ずべ

し。蓋し部落相互の間に戰鬪攻伐の行はるるは、地勢の限劃より明に敵味方の別るるが如き場合に多く、支那の當初に在りて地勢は斯事の著きを致さざりき。固より群の內に於ける小紛爭は、之を想像するに難からず。

斯く外敵と鬪爭するの稀なる社會が、政治的社會體制の發達を成すの遲遲たるは、固より其所にして、乃ち超群の人物出つるも、亦其施す所の純ら文化の上に在るべきは當然の勢なり。有巢氏、燧人氏の敎導は暫く學者の套言に隨うて自然民族社會の事項と做すも、支那歷史の第一頁を伏羲氏に起すとして、其事は卽ち敎化の事業なり。是れ實に此社會特殊の起點にして、起點に於ける特質の影響の、後代其社會進化の上に絕大の影響あるは實に想察すべきなり。且這般文化に於ける先覺者が、立敎、醫藥、及經濟の事を敎ふるに止まり、絕えて超絕的思辨に趨るの事なかりしは、是れ抑民族の特性に由るものか、後代の支那文明の根本的特色を致すの事項として注意に足る。

爾來社會狀態の漸く改良發達するに隨ひ、接息交通の區域も次第に擴がり、外敵に接觸するの場合も幾分か頻繁を加ふ。之と相駢ひて、經濟機關は漸く亦發達し、之に促されて社會體制亦發達の要を增し、是に於いて支那民族は、文化卽ち敎化經濟の上に於いて頗る著き發達に造れる頃、始めて較完全なる社會組織の成形を得たるもの、之を堯舜の時代の眞相と爲す。

堯舜が支那國家社會の元首たるや、文化と政治との首

長となり、乃ち組織上には政治的首長たり、事業上には教化經濟の首長なりき。夫れ經濟の事は、其要項既に前代の教化に賴りて四民の共に知る所、今は唯一般に平を持するの政策を取り、又諸般の事を管するに力むれば足る。禹湯を經て世は益進み、而して版圖益擴まり、隨うて國内地勢の變化も亦漸く加はり、所在多少分化の勢を呈し、是に於いて周代に至りては、更に政治的體制上の一大釐修を爲すの必要を生するに至れり。而も政治の釐修に伴うて、一切制度の發達を成し、制度の内容は、唯政治的事項のみならず、實に教化及經濟の事項を以て其大部を成すは必然にして、此國社會本來の特徴は此際にも亦十分の面目に於いて保持せらる。斯かる制度の體系は、卽ち周の禮其者に外ならず。租稅の政策、社會主義の經濟策の如き、當時已に著く發達せる所、唯國際の關係のみは極めて原始的なり、支那社會が今日文明社會の有する一切の機關運營を具ふるに至れるは正に此周代に在りとす。

周代の文明は斯の如く彬彬の美を成す、其漸く衰微の兆を呈するや、犬戎の來侵あり、而して地勢の分化的影響は遂に明なる分化を發達せる政治組織の上に現し來れり、春秋戰國の時代卽ち是なり。此度の分化は、既に判明なる政治組織を得るに至れる後に係るが故に其各個も亦皆判明なる政治組織を有す、乃ち支那社會は茲に始めて判明なる分化の狀態に至れるなり。

之を一統せる者は秦なり。之に繼げる者は漢なり。後漢

の明帝十一年、佛教印度より入る、抑、儒學及九家の學說の[三四]欝然として興隆せる、春秋より戰國の時代に至り、從來實行の傳承、茲に始めて思想の對象となり、卽ち行の知の生ぜるが、爾來既に五百有餘年、思想の開展、既に多少超絕を思ふ、纖維五行の說に於いて、方士の迷說に於いて其端を發露す。時なるかな佛教一たび入りて乃ち大に行はれ、超絕的思想生活茲に大に起り、乃ち道教を生し、見在及實現は從來此國教學の要諦なりしに、今や漸く賤まれ、乃ち或は東漢學者の淸節虛行となり、或は六朝文學の浮文靡詞となり、三國の際、獨り諸葛孔明の大賢なるありしも、蕩蕩の勢、之を回さむこと難く、而して支那は學問文章ありて眞個の學問、示命的實力を有する學問なきの社會となり、

三四　道家、陰陽家、名家、法家、墨家、縱橫家、雜家、農家、兵家、詳なるは拙著哲學大觀中篇第六章に之を述ぶ。

理想なきの實現、知なきの行は是れ形容の矛盾にして實際に存立せむこと難く、支那社會は之が必然の運命として、茲に土崩瓦解の匪運を趁ひ、遂に南北朝五胡の大亂を致し、文化の上よりも、社會統制の上よりも、全く見るに足る者なきに至り、而して佛教獨り此世ならざる超絕的信仰の勸めを以て、時を得て益〻興隆せり。梁武の臺城に餓死せるは、實に支那社會全體の雛形なりき。支那社會は今や西方淨土を欣求するに急にして、國土の胡狄に侵略せらるるを顧るの遑あらざりき。

是時に當りて支那北邊の異種は雜然として粗〻成形的國家社會を成し、或は往往亦絕大を致して、乃ち中國の社會民族を脅せり、[三五]而も支那の文物は既に其獨自存在に於

三五　北魏の拓跋氏、北齊の宇文氏等其尤なり。

いて太た微弱となり了せるを以て進みて大に胡狄を化すること能はず、胡狄の文明、其開展亦固より以て中國に加ふるあるに足らず、乃ち蕃風南漸は未だ支那文明に於ける影響の著大を致す能はざりき。唯爾後の社會的活動に於ける勢力の此際新に附加せるあり、中國民族の一旦既に社會的萎靡に陷れるに拘らず、更に崛起して隋唐の社會的興隆を見るに至れる所以、其動因の一は實に此に存す。

斯の如く、文化の上にも統制の上にも土崩瓦解の匪運窮境に陷れる社會は、一旦秩序ある社會組織にして得らるるあらむか、飢者の食を擇ばざると一般、他を顧るに遑あらず、是に於いて較、容易に統整の功を成せる者、隋の文帝あり、降りて煬帝の極端なる專制君主として出現し得たる、皆此勢に乘せるもの、曩者始皇が長城を築き成して以て後世に遺せるが如く、煬帝や私慾の暴横と共に克く偉大なる運河を後昆に贈遺せり。

隋は我織豐二氏の如く、唐は卽ち德川氏なり。斯く隋氏によりて基を開かれたる一統を大成修飾して、再び粲然秩然たる支那社會の統整を成せる者を李唐と爲す。李唐の統制及文化上の設備は周の古制に本ついて補修する所あり、而も藩鎭の制は分化の備を成し而して却て分化の勢を助長せり。唐の初葉は儒道を尙ひ、中葉以後佛教漸く盛に、人心倦怠[三六]して朋黨起り、唐は藩鎭の跋扈と共に亡び、五代の擾亂は多少の分化を成し、而して宋に於ける統

三六　此事頗る詩風の變遷にも察すべし。

整を見るに至れり。

宋の文明は哲學の興隆を以て著し、其他統制及文化の事項については特に觀る可き者あらず。蓋し支那民族社會本來の趨向特色は、社會の統整成り、秩序立つに於いて直に復發揮し來り、文藝學術の興隆は乃ち社會活動の中樞的事項として現る。此際外夷は漸く既に强勢となり、復昔日匈奴の唯薄弱なる統制組織を有せしの比にあらず。遼や、金や、將た元や、皆唯文化の一部卽ち哲學的思辨に於いて宋の社會に一歩を讓るに過きずして、其强固なる社會統制は毫も讓る所あらず、漸く之を駕して進むに至りて、所謂宋學と稱する哲學は毫も社稷の盛衰に力を効さず、舟中大學を講して宋は以て滅ふ。

元に於いて、支那社會は玆に始めて規模の大なる統制組織を有する外夷の統制の下に來り、而して社會の版圖亦擴大せり。而も同一社會を成せる異種民族の間、異種文明の間に、起るべく期待せらるる現象は、蒙漢二族に於いて此際多く之を見るを得ず。一たび漢土に入りては、蒙古族の社會固有の文明や殆ど言ふに足るものなく、元は久しからずして名實共に漢族社會の統制者に化し了し、元といふ名目は唯政治的首長の族屬の變遷に過ぎず、元衰へて明之に代るに於いて亦復た然り。

清に至りては頗る既に元朝の衰微に鑑み、異種文明の觸接に於いて、華夷の消長の餘りに的面なるを防ぐに工夫を凝し、而して得たる所、所謂康熙乾隆の政策は、積極に

夷の文明を長成して以て華の文明を調攝するに在らすして、寧ろ消極に華の文明を消磨して以て夷の文明の下に拜跪を要するに在りき。是を以て文化の上に於ける滿漢の調和は消極なるも行はれ、同時に統制上滿漢兩族の秩序亦立ち、而して之に要する一切の代償は唯り渾一體たる支那國家社會の存亡盛衰に向うて賦課せられたるの實狀を致せり。所謂支那文化の好學的特性は復た清朝に於いて其端を現し來り、政治家は之を利用して支那學問の性質に第三の變遷[三七]を與へ、而して考證學風茲に生し、昔在純ら實行的なりし學問文化も、今は極めて非實用的なるものに化し了せり。而して清に於いて支那社會は斯く薄弱なる、困難なる立場に於いて、世界歷史の一要素と

三七　拙著「哲學大觀」中篇第六章「陸象山序論」及結論之を明說す。

して之に沒入す。

之を綜するに、支那社會の着着實現的に發達せるは、周代の極盛時に至るの歷史を以て明に視るべく、爾後は唯統制に於ける一分化一統整の遞出を見、其度每に幾分統制組織の形式的發達を伴へるのみ、文化の一部たる思想の方面には佛敎を以て、其以前漸く萠したる超絕的思辨は大に發達し、其影響として人人見在及實現を輕視するに至り、益〻支那社會統制の不鞏固を致すに助けたり。其思想錬磨の結果は、印度思辨の方式を支那在來の敎學に加へて宋の哲學を成せるのみ。

支那の歷史に於いては、人民の統治者に對する反抗、所謂自由民權の發達史あらず。人民の反抗も地方の草賊に

止まり、草賊の最大なる者、統治の朝を覆して之に代るに止まり、此際を以て民權の發達を成すに至らさりき、其所由は、一に土地の極めて大なりしが爲に、人智の未だ大に發達せざる社會統制は、代議制を不便とし、服從制を至便とせしこと、二に統治者は單に統制の首長にあらず、寧ろ教化の首長たるを本質とせしが故に、君民の關係に權限爭議の思想は萌すを要せざりしこと、是なり。此に附隨して、人民相互の間にも、人生規定の要諦は、道義を以てするに存し、權義思想の發達を要せさりしなり。[三八]

支那社會の發達を約して表示すれば左の如し。

(壹)創始時代、純教化　伏羲以來

(貳)小成時代、教化兼統制　堯舜以來

三八　皮相の直觀なるに過ぎず。一は歐洲の民權思想の發達を成すに至らさりき、其所以は、其服從制を至便とするを以て、君民の關係は、寧ろ權利義務の關係に値するものなり。歐洲の民權思想は、其長物なる君權と獲得し、其長物なる君權と獲得し、其長物なる君權と獲得し

(伊)小成、內的文明の維持　元明
(呂)大成、內外文明の特色喪失　清

第五節　西亞南歐の興廢

歐西の所謂世界歷史は西亞、南歐、歐洲、米洲の歷史の總稱なり。西亞は是れ彼等が東方諸國と謂ふ所の者なり。

西亞諸國の史迹に於いて第一に見はれ來る者をナイルの河滙に建てる埃及と爲す。

此國の社會組織は、强力なる中央首長の下に統制を完うしたるものの如し。その研究は近時僅に開けたるが故に、東西の學者多く詳密なる知識を缺く、[三九]社會組織唯統制を重んずるに偏し、統制上の一合一分の連續を以て、古埃及の歷史は掩はる。

次に來るは、亞西里亞の歷史なり、波斯の歷史なり。

皆夙に鞏固なる統制組織を成し、殊に波斯は哲人の組織を歷たる

三九　埃及に關する考古學的研究は尤も史蹟及び此の關鍵豐富なるものにして、之より入倉庫なるべき古蹟殊に博物館なるものにすきにカイロ及び埃及に就いて研究するに荷くも一双の眼あるものは、前の五千年の昔の變遷の跡を交通、社會に及ぼしたる其の現象なり。然るに埃及及び亞西里亞は迫來なり。

固有の信仰を有し、社會文化の體裁略ぼ具備せしこと今日より想定せらる。故に其國運遠く繼續して、以て今日に及ぶ。

此三國の史蹟此の如きも、其歐洲の歷史に影響し、隨うて見時の世界に影響すること甚だ大ならず。西亞の民族に於ける他の三國は、之に反して大なる影響を後世に及ぼせり。非尼西亞、猶太、及亞剌比亞、是なり。就中非尼西亞は經濟を以て、猶太は宗教及法制を以て、亞剌比亞は學術及宗教を以てせり。

古代に在りて、非尼西亞が內、產業立國の國是を定めたるは、外邦の影響を受けたると地勢との爲なり、外、產業の福音を遠近に齎らせるは、地中海に濱せる地勢、之が主因たり。

猶太の哲人統制は頗る支那に於けると趣を同じうす、亦幾分か日本に似たる者なきに非ず。其聖君は皆豫言者として宗教的崇敬を受

け、而して漸次成れる所は律法と宗教となり、猶太の法制と宗教とは不可離の關係なるを、社會統制の衰へて後は、宗教のみ殘骸を留め、而して之を修飾更隆せる者を基督と爲す。

亞剌比亞は更に大に後れて起り、猶太と全く趣を異にし、學術の進歩を以て特色となししが、此特色の上に立ちて一の宗教を創し、一時之を以て西亞及全歐を風靡せる者を馬哈麥と爲す。

是等の六國は、支那と相駢ひて、世界歷史の淵源として最舊なる社會なり。

今六國全體を一大社會と見て其發達を徵するを得可し。埃及、亞西里亞は純統制的なり、波斯、猶太は教化と統制とを兼ぬるものなり、而して非尼西亞、亞剌比亞は更に教化と産業との方面に進めるものなり。是に於いて彼等の對外關係始めて大成の時期に達し、漸く玆に世界歷史の遠源たる資格を獲るに至れり。

南歐に於ける社會組織は、希臘及羅馬幷に加答互の發達に於いて見はる。凡そ西亞に於けるの非、猶、亞の三國と共に、後代歐西文明の成立に大なる影響を遺せり、此事殊に希臘と羅馬とに著し。

希臘人の史上に印せる事蹟の特質は、始めて個人單位の統制組織を世に示したるに在り。其社會は極めて小なる區劃を成し、交通の術未だ開けざる古代に在りて、一種特殊なる社會組織の發生發達に便なりき。希臘の全邦、既に其版圖に於いて大ならず、而して更に小國の其裏に分立せるは、相互社會の影響に對する感觸を鋭敏ならしめ、以て對外關係の發達を促し、平常相互に競進し、有事の際

には希臘以外の國に對して大同團結を成す。波斯襲來以降、明確なる覇者の成立を必要とするに至り、而して此國固有の個人單位は幾分の制限を受け、ペロポンネソスの戰爭を經、自由主義を解せざるマケドンの興起に逢うて、乃ち其脚下に跪き、遂に羅馬の隷屬となるに至れり。乃ち見るべし、所謂自由主義組織の社會も、唯當時特殊なる希臘の地位に適應せるもの、一旦對外的に其小地圈を脱逸するに及びては、既に純乎たる成立に堪へざるを。我德川封建組織に於けるが如く、希臘の瓦解は亦對外的形勢の變動に負へるもの多しと爲す。

羅馬も亦希臘の如く本來個人主義に據りて其國を組織せるも、其漸次擴大するに隨ひ、能く法制を以て統制を成し行くことを知れり。是れ羅馬の運命の希臘と同じからざりし所以、但彼が如く新舊版圖の間に嚴密なる法制の區別を立て、而も猶其全版圖の膨大に勝つこと能はず、遂に一たび獨裁君主を戴き、而して僅に統整の功を全うし、爾後徐徐に分化の運を趁ふに至れるなり。羅馬の末年、耶蘇教の榮えたるは正に支那に於ける佛教と同轍なり。現實を去りて超絶に就く、人心の倦怠を見るに餘あり。乃ち西ゴオト人の乘ずるあり、匈奴の襲來あり、正に是れ五胡の亂。而も支那の如く統一に慣れず、統一組織完全ならず、亦地勢の不便多き羅馬は、更に隋唐の崛起を見ることは能はざりき、是れ寧ろ支那が特殊の利且弊とせる所たり。斯の如くにして南歐の舞臺は閉ぢられ、而して歐洲の舞

臺は開かる。四〇

四〇 トゥカルウズ法科大學教授 Maurice Halbwachs: La science sociale traditionnelle は從來西人の史觀に比して一頭地を抽づるの說を出だせり。其進歩論の第三章 Evolution dans le Progrès に於て中世及復興時代の文明社會組織の性質を論ぜる、頗る參考に足る。氏は又 Demi-Moyens Âges として、埃及支那及ビザンチウム帝國を擧げたり。

第六節　歐洲社會の發達

歐洲社會の發達は、羅馬帝國の瓦解、民族移轉の大分化に始まり、十字軍の宗教一統あり、中世の終に於ける政教反撥の分化あり、再び政治的統制の各國に打建てるに由りて統整を成し、而して此統整の國際的にまで進まむとするの努力に於ける一波一瀾、卽ち近世の通勢なり。

抑、中世の始に於ける歐洲の社會を見れば、文化未だ開けず、群雄割據の勢を成し、僅に基督教に賴りて無形心靈界の綱維を保ちしもの、其內的文化の成績は唯羅馬の勢力の及べる範圍に於いて較、見る可き者を存せしのみ。獨逸は所謂日耳曼文明を以て自ら誇稱し、敢て古希臘古羅馬文明と對立するの地歩を冒さむと擬すれども、到底古埃及以降の發達せる諸國と、其國民生活社會組織の成績を競ふ可くもあらず。殊に國際關係は、希臘羅馬以來、未だ大に發達せず、希對波、希對羅、若くは羅對加の關係に於けるが如く、唯戰鬪攻伐の連續を以て國際の要義とせるものなりき。

是時に當りて先づ强大なる國を作りしは、羅馬文明の餘光により、回教國に打勝ちしを緣として興隆せる、佛王シャアルマアニュなりき。此後者の事業の爲に、彼は羅馬教主を陽尊するの政略上得策なるを知り、而して法王廷が權威を中世に振ふの端を發けり。

シャアルルマアニュの國は、其歿後直に分化に赴き、而して群雄割據の狀態に至りしが、玆に全歐洲をして一種の統整を成さしむるの事件は生ぜり、卽ち對外關係、殊に人種的宗教的關係より聯合を促せる十字軍是なり。此際亦這般團塊の中核として勢力を博得するもの出で來らざるを得ず、之に當れるもの卽ちホエヘンスタウフェンに由る日耳曼の興隆なりとす。

此事件を緣として歐人が未だ曾て有せざる西亞の文明は輸入せられ、久しく耶蘇教の繫縛の下に愚にせられ居りし社會は漸く醒覺して、先づ希臘古典の研究となり、古學の復興となり、耶蘇教の教化の不滿不足を感知せるの徵候玆に歷然たるを顯し、教法改事と相倚りて、社會に新光明を與ふるに至れり。

西班牙葡萄牙は當時漸く盛に航海の業を開き、國益、富み、而して其政治的闊閲たる日耳曼との聯合は、一時歐洲の最大國を現せり。其後佛國革命に於ける那翁の版圖は、從來歐洲に於ける偉大なる版圖の最後なりき。

近世に於いて歐洲各民族は、所在封建の小統整より、更に國民的統整を成し、是に於いて近代の諸〻の大なる國民的結合、卽ち衆國の統整成立を告ぐるを致せり。

英島國に在りては、英族蘇族の統整先づ成り、愛族は羅甸の起原を以て政治的の勢より統整を成すに向へるも完全を致すこと難く、其自治問題は今に於いて猶困難なる案件たり、大貌島に於ける羅甸人卽ちウエエルス族は今や次第に削弱に向ふ、斯くして英の國民社會は成立を告げつゝあり。

佛蘭西に在りては、アンジュウ、ブルゴオニュ等所在強大なる封建中心あり、其優なるもの往往覇を稱して以て佛蘭西王國の體貌を成せるありしも、封建の通弊たる、尾大不掉は初より必至の勢たり、蓋し這般の國家に在りては、頭亦尾の少しく大なるものに過ぎざればなり、然るに近世の世變、封建の頽廢と共に中央集權の勢大に成り、而して佛蘭西王國亦茲に建造を告ぐ。ブルボン王統は始めて帝王の盛榮を經驗し、而して其濫用は佛國革命の一緣を供せり。

イベリア半島の國民社會亦全く同樣の手續に由り、小統整の結果第十五世紀に於いて、アラゴン、ナヴァアル、カスチリア、葡萄牙の四王國あり、アラゴン王フェルヂナンドと、カスチリアのイサベラと婚媾して、兩國一となり、更にナヴァアルを平らげ、グラナダの回教國を服し、西班牙王國茲に建てり。唯其地位歐の南隅に僻在して、鹿を中原に逐ふに堪へず、國勢振はず、以て今代に至れり。

獨逸民族は、歐土の中央に據有し、而も中世に於ける其勢威は封建小版圖の分立を以て殆ど地に墮ち、形勢の雄を以てして覇を中原に稱する能はざるのみならず、形勢は寧ろ統一の實力なき民族に禍し三十年戰爭に於いて其弊尤も著きの極に達す。既にして較、其西隣に後れ、第十七世紀の末葉より、ホオヘンツォルレルン家の下に在る普魯西に於いて漸次統整の中核を生し來り、爾來漸く統整の實蹟を擧ぐるに向ひしが、那翁戰爭の當時、亦一たび天の試驗に逢ひ、形勢に伴はざる實力の短所、實力を伴はざる形勢の弊點を經驗せり。第十九世紀の後半に於いて、政治問題の解決と共に、此統整的國民社會建造の大業は茲に成れり、

以太利は、中世以來羅馬教堂の所在として、歐洲の中原爭奪の地として、恰も武家時代の京都の如く、又支那の洛陽の如く、天下事有れば必ず先づ兵禍を蒙り、分化の狀態に在るの年所久しかりしが、以太利民族の以太利は、第十九世紀に於いて實現せられ、創業に伴ふ幾多の困難と戰ひ、[四一]分裂せる各王國を統一し、以て國民社會建造の時勢に伴へり。

露西亞は、中世の中葉始めて基督教の光被に逢ひ、酋長國の中部に

四一　セイドモントのヴイツトリオ・エムマヌエロ二世の下に於いてなす。

漸次勢力を占め、第十二世紀の中葉、莫斯科は一公國の首都として建設せらる。其後相次いで韃靼、土耳其との衝突の厄あり、而も却て次第に國勢を增大し來る。[四二]彼得大帝に至りて黑海岸に出で、是に於いて一面、土の力を殺ぎ、他面全露の統整を成すの基を置けり。而して漸時國の組織を整へ來れるものを露西亞帝國とす。

其他歐洲諸國に就いて、丁抹、那威、瑞典は統一より分れ來りて國勢振はず、和蘭、白耳義亦然り、小は益〻小、若くは小の遂に大に併せらるる、若くは合するの傾向歷然たり。墺太利は獨逸統整に於ける失敗者として幸にボヘミア其他のスラヴ族、及匈牙利のマジアル族と提携して、不等質隨うて不安定なる暫定的統整に一條の活路を見出し、土耳其は次第に其異族の地域を失うて漸次分化の狀態に在り。獨り瑞西は、米合衆國に華盛東府あるが如く、國の大小の外に起然たる特性を發揮す。

之を要するに、一二の例外あるも、統整以て大なる國民社會を建造すること、是れ近世に於ける歐洲社會の通勢にして、這般大國民たること能はざるものは、遂は敗滅を取るの免れ難き實勢ありとす。

[四二] 韃靼と爭衡の餘勢はイワン・ウエリキイを出だし、莫斯科ノヴゴロッド諸邦の聯合成し、土耳其と爭鬪の際には則ち彼得ウエリキイを出だせり。

然れども、是れ唯歐州の、所在成し若しくは成しつゝある所の國民社會のみ、未だ曾て大なる國際社會の實地に計畫せらるるあらざりし。[四三]蓋し歐洲の社會は、古來時に絕大なる君主を出して、其威風遠く域外の草木を靡かすありしも、未だ能く眞個統制上の統整を成せるあらず。

社會統整の實地作業は唯宗教的に於いてするのみ。故に歐州社會を以て一の社會と見做すときは、其大成は十字軍に在りて、其瓦解は教法改革に在りと謂はざる可からず。今日に在りても、各國社會教化の一要素として宗教を用ゐるが、實は宗教の第一的效力は夙に既に遠く過ぎ去りて、今は各國の別存對立を原理とする政治的統制を

[四三] 歐洲同盟、歐洲社會、基督教國の稱は、或は一の夢想たり、或は今日に至りて一の空名に墮し了せるものにあらざるはなし

以て立國の第一要義と爲す。愛國心を以て新道德の要義と爲すは一般の風潮なり。[四四]唯千餘年間の馴致の勢未だ容易に宗教の滅絶を見るに至らざるのみ。

政治的統制と宗教的統制との爭は、教法改革に於いて破裂せり。それが結果として、宗教は全く政治的統制の上に有せる勢力を失墜せり、卽ち宗教統制は、全く政治的統制の下に立つか、若くは其以外に立つか、兩者の一を擇びて存するの已むを得ざるに至れり。獨り此變動に於いて全く無關係の地位に立てるは、東羅馬を經由せる希臘正教を奉紹する露西亞なりとす、是に於いて宗教的統整の努力は地に墜ち、而して各國民社會に於ける歐州社會の分化、及各社會の內に於ける政治的社會的結合のみ、獨り

四四 獨逸の如き尤も著し

行るるの時勢を致せり。

歐洲近世の最大事件は、有形科學の發達の著大なるに連れて興利の道の大に開けたるに在り。是に於いて交通機關の發達は土地を縮小し、各國をして相接近せしめ、相互感觸の銳敏を增し、遂に世界全局に對して交通を擴張し、國民社會の地域の擴大に向ふの大勢を輔成す。

歐洲各國社會の內部に在りては、酋長部下を率ゐて攻略爭奪と事とするより、部下亦其所得を求め、首長、貴族、及僧侶の互角對立となり、種種の爭亂の餘、所謂第三級の地位は宗教の衰頽と共に、經濟社會の發達と共に、進み來りて、其統制に與るの權利を保認するに至れり、所謂政治的自由の增進是なり。

歐洲諸國の植民政策は、羅馬膨張史の反覆と見て大差なし。[四五]

是故に、歐洲社會を通觀するときは、其一大社會として成立するは、唯薄弱なる宗教的統制に於いて之を見しのみ、支那羅馬に於けるが如く、政治的統制の全歐を統合せることは、未だ曾て見ざる所とす。

歐西各國社會の新組織は、文藝復興に始まり、第十九世紀の産業組織に小成し、其大成は則ち眞に實理的智能及道德の確立に至るを期せざる可からず。

歐洲社會の發達を圖表するときは左の如し。

時代	宗教的統制	科學的智能	經濟產業	國際關係	政治的自由
ペテルス	創始	未開	未開	未接	皆無
シャル、マアニュ	小成	未開	未開	少接	皆無
十字軍	大成	萌芽	少開	大接	皆無
敎法改革	分化	少開	開展	攻伐	萌芽
佛國革命	殘骸	開展	開展	攻伐	激發
十九世紀末	灰燼	盛開	盛開	競進	小成[四六]

第九、十節參照。

四五

歐洲學者が社會進化の證納的驗徵を資するの事實は此に基づいて今日に於ける過ぎず、今日耶蘇教國と稱する者の薄弱なる、亦以て見るべきなり。Ratzenhofer の試に文明表に倣ひて之を圖象形とし、時代を縱軸とし、高低を橫軸として、曲線若干を以て之を表すときは能く各項消長の函數的關係を觀るべきなり。

四六

第七節　西大陸社會の發達

第十八世紀の末より漸次發達せる南北兩米の諸共和國は、實に近時に於ける純人意社會の好標本にして、殆と自然の發達なき、社會の規定としての歷史を有せざる、社會と謂ふ可し。是れ蓋し人間智能の開展が、單に社會を指導するのみならず、亦社會の組織其者をも人意的に成すを得るを證せるもの、誠に近世人間進步の好標徵たるを

失はず。

北米合衆國の大なる成功を見て、各國多く此に倣へるも、人間性能の開展未だ充分ならざるに於いては遂に大なる成功あるなきこと、墨是哥以下中米南米の諸國に於いて之を見る可し。又、社會の規定は同一理法の活動にも異なる效果を與ふること、佛蘭西共和國の成蹟に就いて察す可し。北米合衆國が彼が如く大なる版圖を有して而も瓦解の傾なきは、人間性能の開展の結果[四七]とはいへ、一は其交通發達の今日に於けると、二は所謂モンロオ主義の一面、我より進みて事端を域外に開かず、域内の事は域内にて處理するの方針を取りしとの二因に由る。而して米人の一部、今や此第二因を遺却せむとす、百年の後、米國を誤る者、或は端を此より發せむか。羅馬舊史の語る所に聽くは、今に於いて儒生の閑事業に止まらざらむとす。

四七　而も尚南北戰爭あり此時外國の干涉ありたるがゆへに、但其運は西大陸に孤立せるが爲に危かりき、此患を免れたるなり。

米國に於ける無盡藏の富源は、歐洲、亞細亞各國より種種の民族を招徠し、而して多く是れ產なく德なく、唯體力意力の旺盛なる徒たり、是に於いて米國社會は、衆民族の混淆と、這般唯體力意力に賴りて富を作る習氣との尤も赤裸裸なる發現の場となり、當初自由と淸淨とを主義とせる東都諸州、新英蘭の民族精神は、稍稍として萎靡不振に陷るに至り、米國風は一種の雜然、彪然、時に鄙野粗莽を免れざるものとなるの趨向を現し來れり。

米國の社會は、實質上五期の絕大なる變遷を經たり、第一期は列國植民競爭の時代なり、第二期は民族の優勝統一の時代なり、第三期は

新植民民族混濁の時代なり。第四期は黑人解放の時代なり、而して第五期は東亞人交渉の時代なり。而して之に伴ふ所の社會の變遷は左の五項に於いて現形す、第一は國是の變遷なり、第二は國憲の變遷なり、第三は軍備の變遷なり、第四は經濟の發達なり、第五は道德慣習の變遷なり。[四八]

西大陸に於ける統整の中樞は二點に存す、一は羅甸亞米利加の統整に歸向する所の凡イベリア主義[四九]、一は米合衆國を中心として先づ西大陸自餘の部分の統整を成し、進みては羅甸亞米利加をも其下風に立たしめ、竟に全大陸を統一せむとするの凡米主義[五〇]是なり。甲は所動的なり。乙は能動的なり、羅甸亞米利加の最も有力なる活動の本地は實に南米に存す。イベリア本國に於ける古き株は漸次朽敗に向ひ、其根より新に出でたる蘖の、大なる元氣を以て發育長成せるに喩ふべきは、實にイベリア民族の歐洲及新大陸に於ける消長の實蹟なりとす。[五一]

凡そ西大陸新造の諸國は其國勢の順當に舒暢し來れる過去を有するのみ、未だ起伏波瀾の歷史を得ず、その之有るは今日以後の事に屬すべし。

第八節　人口の增殖

人間の發生以來、人口の增殖は人間發展の一大事項として現れ來る。

人口の增殖は、近時に於いて極めて著しき事實にして、此を以て類推すれば、古き時代に於ける人口增減の大勢も亦略之を推定するに難からず。大概人口の增殖は加速

四八　此事世俗多く注意せず、米人も亦其識者すら之を電覩せるもの少し。拙著世界列國の大勢、第十五篇米國の社會の眞相、第二段之を詳說せり、參看を要す。

四九　Pan-Iberianism.

五〇　Pan-Americanism.

五一　其詳なるは拙著上述の書同篇第三段に之を述べたり。同書各國社會民族の將來に向うて輝かむ、社會學的斷案を試むるあらむを望む。就いて參看あらむを望む。

度的進動を成し、約そ過去一百年間の增加率と、其以前一千年間の增加率とは、稍相匹似するものの如し。

人口統計の完全なる規劃的實施は、各國大抵一八二〇年以降に屬す。今零細なる資料によりて研究の成績を列敍す。

日本の神代に八百萬の神等を天安河原に神集ひに集へたまへること記傳に見ゆるも、是は固より統計的數量を意味せず。爾來德川氏の中葉に至るまで、稍信憑すべき統計は之なきも、算出の方法は之を立つるを得べし。一は大化改新に於ける租庸調法に本づきて、中央が聚め得たる總高を、率を以て除して得ること、是なり。二は班田收授の事實に本づきて、全國の田地を各口分の率を以て除して得ること是なり、田地の總反別は田租の總高を、率を以て除して之を得べし。三に賴朝の總追捕使となりしとき、追捕を以て秩序を維持するの費用として毎段米五升を課せるより、耕地反別を算出し、之を以て給養し得る全國人口を算出すること、是なり。四に豐臣德川の初世に於ける草

五二

伊東祐穀、世間年鑑擧ぐる所は左の如し

紀元一二七〇年推古一八	四九九萬
一三九六年聖武、天平八	八六三萬
二三八三年中御門、享保八	二六〇七萬
二四五二年光格、寛政四	二四八九萬
二四八八年仁孝、文政十一	二七二〇萬
二五三二年明治、明治五	三三一一萬

高を基礎として以て人口を算出すること是なり。大抵日本の人口は紀元千五百年代には約九百萬、二千五百年代には二千七百萬を算し安政の初年には二千七百八十四萬を算し、[五二]六十年後の今日に在りては、新版圖の添加ありしを省除して、實に五千四百萬を數へ、年年の增加率一萬人に付百三十許人に上る。唯上古の人口、之を知るに由なきを以て、其繁殖の比の確ならざれども、歷世民政に宸衷を勞せられ、崇神、仁德、仁賢、繼體の朝の如き、殊に戸口の滋息せるは史の明證せる所。武家の世に至りて、北條氏の若干時代を除くの外、干戈落落、率ね寧日なかりしに於いて、恐らくは人口の增殖甚だ著からざりしなるべく應仁の交に在りて、都會の白眉たる京都の衰殘著きにも拘らず、地方亦必ずしも殷賑の實蹟を現さざるは、當時人口の頗る衰殺に趨けるを察すべし。德川時代の始より終に通じて二千五百萬乃至七百萬を昇降し、人口の殆んど沈滯せるは注意すべし。而も史實の大體に於いて、日本人口の增殖は、正に本文の綜概に合致す。

支那の人口については、計算の基礎たる包括的事實殊に乏し。禹貢

の九州經營を按ずるも、人口に關する手掛りなく、古來唯軍事及專制君主の大事業に役せられたる人數に於いて當時人口の盛を察するのみ。秦の白起が趙軍四十萬を坑にせる、始皇の阿房宮を營み驪山を修し工七十萬を役せる、文辭の誇張もありつべし、史記の貨殖傳、及其流亞たる爾來の史乘を按すれば、人口盛衰の大勢は粗之を察するを得るが如きも、何の統計的憑據あるなし。長安洛陽の如き大都市の規模に察し、之を其模寫たる我平城平安に比して大約の人口を算出すること輕、確實を庶幾すべき一法とすべきも、都市よりして支那全體を推算するに何の中介的基礎あるなし。故に支那人口の盛衰を談ずるは演繹以上に出でむこと難し、唯其始終を通じて、大體增加の通勢を趁ひしは疑ふべからず。印度については更に數層の困難、殆ど不可能と戰はざるべからざるが、亦唯類推を以て同樣の推定を成すを妨げずとす。

之を歐西の古代に見るに、各國人口の總計については、固より之を知るを得ざれども、學者の計算[五三]に據りて暫く市府の人口を擧げむに、

五三 Coste: Principe d'une Sociologie objective. P. 160–

五四 Gow et Reinach: Minerva, p.49–102.

五五 Duruy: Histoire des Romains. T.I. p.414

五六 同上、t. II. p.364.

五七 同上、t.III. p.710 Minerva, p.218.

五八 同上、t. IV. p.73.

雅典の西紀前三〇九年の人口は、二萬一千の公民、一萬の歸化外人、及四萬の奴隷を有し、[五四]カルタゴは一四六年其滅亡の時に於いて尙七十萬の人口を有せり。[五五]而して羅馬は人口の增加尤も大にして、西紀前四六三年既に武器を執るに堪ふる年齡の者十二萬四千二百十五を算す、一般史家の採る原則に隨うて之を四倍し、以て總人口四十九萬六千を算す。然るに三三八年に於いては公民の數十六萬九千、總人口六十七萬六千を算し、二六四年には二十九萬二千三百三十四の戰士を算し、總人口實に百二十萬に達せり、而して此外に奴隷五十萬を算す、[五六]或は更に大數なりしとの說もあり。西紀前七十年に及びて、公民の數四十五萬、總人口百八十萬、是れ固より羅馬及其市外地に現住して參政權を行使せるもののみを計算せるものに外ならず、西紀前二八年の統計は、以太利全體の自由公民を計上して四百六萬三千とす、卽ち伊太利の自由人民は實に既に千七百萬に上れるなり。[五七]オオグストスの當時羅馬市の人口は、少くとも百八十萬を算したるべし。[五八]然るにセオドシウスの時第四世紀の末葉に至りて、羅馬の衰勢と、東帝國の興

隆との爲に、羅馬の人口は、百二十萬に減ぜりといふ。[五九]

以上南歐古代の三大市府についての考察なるが、一般に邦國全體については今何の材料あるなし唯ルヴァッスウルの佛蘭西全體に關する計算あり、[六〇]亦歐洲各國に對する類推の一基礎に充つべきを以て、最近の計算を補足して之を左に掲ぐ。

ゴオル（獨立ゴオル及ナルボンヌ）	八〇〇、〇〇〇〇〇	
右を現時（一八七一年以降）の佛國境域（五二、八〇〇〇〇粁平方）に換算して（以下微之）	六七〇、〇〇〇〇〇	
アントニヌス時代のゴオル[六一]	八五〇、〇〇〇〇〇	
シャルルマアニュ時代の佛蘭西	八〇〇、〇〇〇〇〇	
一三二八年	乃至一〇〇〇、〇〇〇〇〇	
一五八一年[六二]	二〇〇〇、〇〇〇〇〇	
一七〇〇年[六三]	乃至二二〇〇、〇〇〇〇〇	
	二〇〇〇、〇〇〇〇〇	
	一八〇〇、〇〇〇〇〇	

五九 Gibbon: Rome. vol. III: p. 130–

六〇 E. Levasseur. La Population française. t. I p.288.

六一 A. Pius Antoninus (138–161) Marcus Aurelius Antoninus (161–180)

六二 Froumentean の計算せる家族の數に據る

六三 宗門帳檢べの計査に據る。

六四 路易十四世の晩年の人口計算を基礎とし又 Forbonnais の計算に據る。

六五 Messance, Expilly, Moheau, Necker の計算平均。

六六 種々の人口の計算の平均。

六七 第一人口調査、以下皆人口調査の成績とす。

六八 Hickmann の計算に據る。萬位を以て切り捨てとす。

一七一五年[六七]	二一一三、六〇〇〇
一七七〇年[六五]	二四五〇、〇〇〇〇
一七八九年[六六]	二六〇〇、〇〇〇〇
一八〇一年[六七]	二六九三、〇七五六
一八五一年	三四九〇、一九三八
一八七二年	三六一〇、二九二一
一八九六年	三八五一、七九七五
一九〇一年	三八九六、一九四五

第十九世紀に入りて歐西の文明諸國は漸く人口調査を始めたるが、其以前に於ける世界各地の人口增減の大勢は粗上來の說述を以て類推すべし、卽ち本文の綜概、今より百年前に至る其過去千年間の人口增加が約三倍といふ增數を呈せるの各地に通じて當れるを見るべきなり。

人口調査ありてより、以來主なる諸國の人口增加を見るに、左の如し。[六八]

國	一九〇〇年	一八五〇年	一八〇〇年
露西亞	一、一二四三	六二二〇	三八八〇
米國	七六四五	三二六〇	五三一
獨逸	五六三七	三五四〇	二一〇〇
墺匈國	四五五〇	三〇二八	二三一〇
日本	四四八〇	二七八五	二五五〇
英吉利	四一八四	二七三七	一六二〇
佛蘭西	三八九六	三五二六	二六九〇
以太利	三二四五	二三六二	一八一〇
西班牙	一八一〇	一三七〇	一一五〇
瑞典諾威	七四〇	四八〇	三二二
白耳義	六八〇	四四五	三〇〇
羅馬尼	五九二	四二〇	二七〇
葡萄牙	五三〇	三四〇	二九〇
和蘭	五二〇	三〇〇	二一〇
瑞西	三三三	二三九	一七〇
希臘	二五四	一二〇	九〇
塞比亞	二五四	一二〇	八〇
丁抹	二四五	一四五	一〇〇
計	五、〇八二八	三、一四三七	二、〇四七四

世界人口增加の趨勢は此に察すべきも、主なる文明國以外の人口は勿論此比を以て增加せるものにあらず。[六九]

世界に於ける人口の增加は、又其密聚の趨勢を促し、大都會の人口遞增し、其各人口總數に對する比も亦遞昇す。

最近百年間主なる大都會の人口の增加は左の如し。

	十九世紀終	十九世紀初
倫敦	六五八〇〇	八六、五〇〇
紐育	三五三〇〇	六、一〇〇
巴里	二六六〇〇	五四、八〇〇

六九　世界人口の總計については、左の諸種の計算あり。マツカルチイは十五億五千五百萬（一九〇〇年）スタインは十四億八千七百九十萬（一八九〇年）クラアクは十四億九千二百八十四萬八千（一八九五年）ウイツクマンは十五億四千七百四十二萬三千（一九〇〇年）ヒツクマンは十六億（同）最近一九一五年末に於ける世界人口總數は約十七億五千百七十萬と算す。

七〇　萬位とす。上方括弧内の一〇一七は一九〇一年、下方括弧内の一〇八七は一八〇一年の略とす。又一八三七は一八三七年の略とす。

伯林	一八八(〇〇)	一七、二(〇〇)	
市俄高	一七六(〇一)	四一七〇(三七)	
維也納	一六六(〇〇)	二三、一(〇〇)	
廣東	一六〇(〇〇)	一〇〇、(〇〇)	
東京	一五九(〇八)	五七、七(四五)	
費拉特比	一二九(〇〇)	二、二(〇〇)	
彼得市	一二七(九七)	二二、(〇〇)	

第十九世紀末に於ける、人口二十萬以上及一萬以上の都會の人口總計を各國人口總數に比すれば其國分比左の如し。

	人口二十萬以上	人口一萬以上
英吉利	二四、七	五四、五
和蘭	二〇、	三八、三
丁抹	一六、三	二二、七
米國	一四、	二七、八
佛國	一〇、一	二四、
獨逸	九、一	三〇、
以太利	八、七	一七、三
日本	七、五	一四、五
葡萄牙	五、九	九、五
墺匈國	五、二	一三、五
土耳其	四、五	
西班牙	四、三	一六、五
羅馬尼	四、二	八、
瑞典諾威	四、	一四、七
露西亞	三、六	一一、二
瑞西	—	一六、七
希臘	—	一三、六

更に一粁平方を單位として人口の稠度を示すときは左の如し、是れ實に交通、就中內的交通の發達を表現する所の事實なり[七一]

白耳義	二二三	七〇
墺匈國	二二三	五二三

七一　コオスト氏の「社會計 sociometrie」といふものは、自國、佛國を一とし其國對佛國、即ち兩國人口總數の比を甲とし、兩國の人口二十萬以上の大都會の人口總計と其國人口總數との比を乙とし、甲乙の比と乙との比とを相乘積なる名づけてしかいへるものなり、例へば十九世紀末、日本の佛國に對する、

$$\frac{3896}{4480}=1.15\ (甲)$$

$$\frac{10.1}{7.5}=7.4\ (乙)$$

$$1.15\times 7.4=8.5$$

社會率は、八五なり。氏は之を以て社會發達の度を表示すべき一種の指數に充てむとせしが、甲は疑問なるに於て、乙は人口の都會集中が果して社會發達の好標徴なりやに疑ありとす。甲は該性質を有するに於ては、更に綿密なる吟味を要すべきも、今唯一種の標數量的計率を創意の標本として之を採用するのみ。

和蘭	一五四	葡萄牙	五五
英吉利	一二七	羅馬尼	四五
日本	一一七	西班牙	三六
伊太利	一一〇	歐土耳其	三五
獨逸	九九	露西亞	一九
瑞西	八四	丁抹	一六
佛蘭西	七二	瑞典諾威	一一

人口より觀察して、往古來今、人間發展の狀勢、正に斯の如し。乃ち進みて交通、殊に外的交通の發達を觀るを要す。

第九節　交通發展の漸勢

交通の開展は古今の大勢なり。[七二]交通は其初毎に他の目的を緣として發達を遂ぐ。乃ち目的の異同に依りて交通を區別すれば、軍事的交通、宗教的交通、政治的交通、通商的交通及文化的交通の五類を數ふべし。

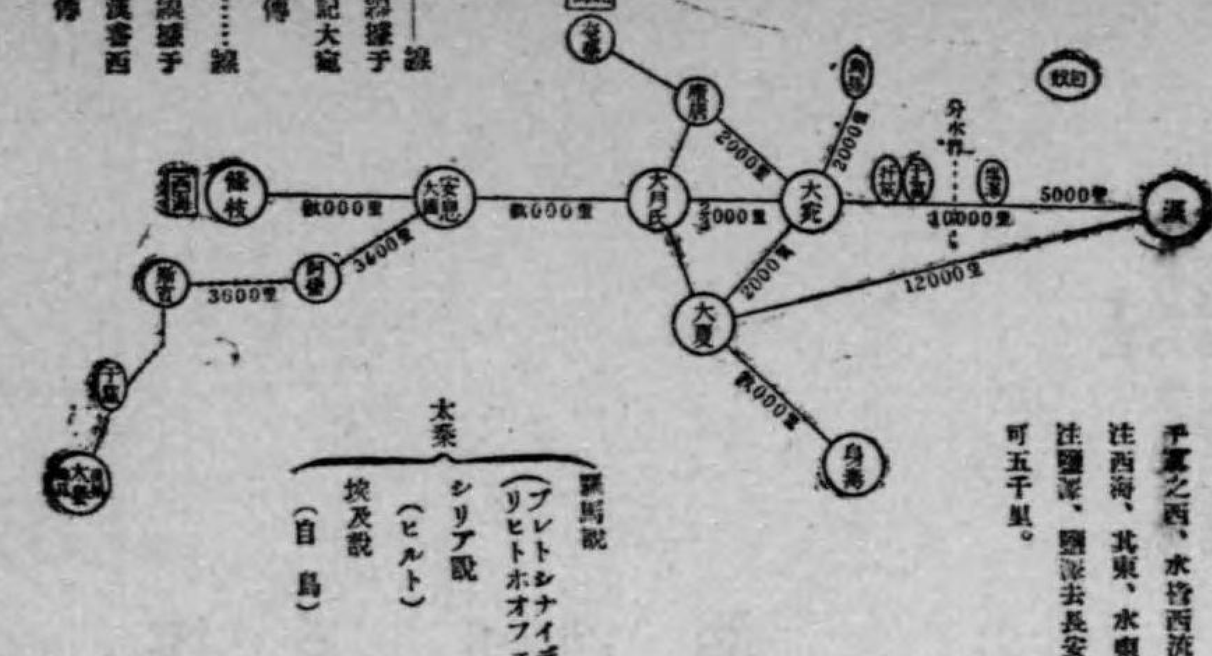
七二　人類は一源なり。假令に多源なるも、一類の生活にと先づ自覺せざるべからず。

交通開展の大勢を概觀するに當初東西兩洋の社會は零細ながらも多少の交通を成しし痕迹を存し、爾後斯かる交通は全く迹を斷ちて、東西兩洋の社會は其各部の裏に於ける交通を次第に開展し、而して斯かる小規模の交通の大に成れるに於いて、近世更に東西の大交通の漸く開くるを致し、竟に世界交通の時期を現するに至れり。

東西兩洋の零細なる當初の交通は支那、印度と西洋との間に見はる。

太古東西の交通は正史の事實として確認を經ず、支那文明はアッシリア文明の分枝なりといひ、黃帝はアッシリアの王者なりといふ、今唯一假說のみ。史期に至るに迨ひて前漢の博望侯張騫は西域に使して、大宛、月氏、大夏、安息、條支等と交通を開く、時は武帝建元年中、西紀

七三　今史記大宛傳及後漢書西域傳に據りて當時支那の西方交通模型圖を作ること左の如し。



于寘之西、水皆西流、注西海、其東、水東流注鹽澤、鹽澤去長安、可五千里。

前約百四十年に在り、漢は政治的目的を以てし、大宛月氏は通商を目的とせしに似たり。[七三]其更に西域に使せしは元狩元年、西紀前一二二年に在り、而して驃騎將軍衞靑の匈奴を擊ちしは是より二年前に在り、爾來霍光あり、後漢の班超あり、章帝の景和二年西紀八七年、匈奴五十八部來降し、安帝の永初四年、西紀一一〇年、南匈奴降る、是より匈奴の勢、復東洋に振はず、而して漸く西、歐洲に向うて民族大移轉の基を成す、是れ卽ち歐洲の天地に大なる震動を與へたる大事件にして、是等は皆軍事的交通なり。唐の太宗貞觀十二年、西紀六三八年、景敎支那に入る、是れ宗敎的交通なり。元の世祖至元十二年、西紀一二七五年、マルコポロの元に至れるは、宗敎的より轉じて文化的交通に至れるもの。當時數十年間、成吉思汗の西征は尤も莊大なる軍事的交通を亞細亞歐羅巴の强半に開きしが、政治的交通の確立に先だちて、夙く中折し、其範圍徒に大にして效果は則ち微小なりき、其後一世紀、莫臥兒帝國漸く起り、第十五世紀の初には、遂に印度を風靡せしが、交通上の價値は成吉思汗にも劣れり。凡そ交通域に於けるの社會發達の小なるや、交通の效果は淺小にして且永續せず。

亞細亞內部の大交通、之を古にして西紀前二十八世紀、セミラミスの巴比倫より印度を遠征せるあり。其後二千三百年、波斯の希臘侵犯なり、後又二百年、歷山の東征ありて亦印度に及ぶ、文化上の效果大と稱せらるるも太だ確なるを得ず、[七四]軍事的に起り政治的に至れる交通は西亞の諸國に限り、印度は依然西洋交通域の外に立てり。

凡そ東西兩洋、兩個の交通圈が、利害關係にも文化關係にも相互に對立不關の地位に立ちし古代期に於いて、時に相交觸せる節節の大要右の如し、此不關別別の狀態を開通して、遂に世界を打ちて一丸と爲すの運命を啓けるは、實に最近の世界交通に在り、而して其間先づ兩交通圈各個の成立及發達を經るを要したり。

七四　耶蘇は佛徒なりといひ其因緣は歷山東征に存すといふも、確ならず。

東洋の三大民族社會は、各特殊の起原を有して其成立を告げ、一定の發達を遂げたるに於いて更に相交通を開けり。交通局面の中心は、地勢及歷史の關係より支那に在

り交通の歸向は毎に日本に存せり。是れ東洋文明調和統一の主體が日本を離れざりしの事實と表裏を相成す事實なり。

支那と日本との交通は多く朝鮮を介せり。其初軍事的政治的交通を導火とし、終に文化的交通に至り、三韓朝貢以來殊に其著しきを致し、百濟佛像經論の獻[七五]あるに迨ひて日本と印度との間接交通茲に起る。支那と印度との交通は是より先約五世紀[七六]既に史實に照著にして、宗教的交通は脈脈として絶えず、六朝より以て唐に至れり。日本と支那との直接交通、正史に見ゆるは隋代に在り、既[七七]にして朝鮮に於ける權力折衝、事夷ぎて日支の間和親の回復より、遣唐來聘連綿絶えず、是れ兩國の文化的交通の黄金時代たり。其後次第に陵夷して、時に冠賊の侵掠を看、[七八]元冠、八幡船、及豐氏の征韓、尤も顯著なる軍事的交通を現し、德川三百年、僅に通商交通を維ぎ、以て現代世界交通の時期に入る歐西に在りて、埃及は夙に亞弗利加の東北部に、アッシリア亦西亞細亞の一角に、各文明の醞釀地を開きしが、フニシアの通商的交通、猶太の宗教的交通は、進みて文明の傳播者となり、其交通圏は遠く太西洋面に達せり。希臘と波斯と、東西相應じて盛に軍事的交通を開拓し、終に歴山東征に於いて印度に達す。羅馬、カルタゴの交通は、此に尋ぎ、羅馬帝國の實現に於いて、殆ど歐羅巴の全部を擧げて軍事的より政治的交通の一大圏域と做し、猶太に發せる基督教の宣傳の爲に素地を供するの準備、茲に全きを致せり。

既にして東西交通の一大結節たる民族移轉を經、又羅馬社會の崩解、新なる民族社會の所在勃興するを見るに迨ひて、各地の間、交通關係漸く密邇を加ふ。[七九]基督教、地中海

七五　欽明十三年、西紀五五二年。

七六　後漢の明帝永平八年、西紀六五年。

七七　推古十五年、西紀六〇七年、小野妹子の遣隋。

七八　後一條寛仁三年、西紀一〇一九年、刀伊賊卽女眞の入冠、等。

七九　デエン人ノルマン人等北方海賊的民族の波爾的北海方面より氷洲、綠の方面に海賊的軍事交通に於いて横行せる亦見道すべからず。

の北岸路より入り、サラセンの勢力、其南岸路を經來り、[八〇]遂にトゥウルの戰を成し、前者の覇權茲に成り、餘勢竟に十字軍として東方に逆襲を試む。大規模なる軍事的交通は一轉して著大なる文化的交通を惹き、竟に歐西中世史の局面を轉じて近世史の新局面を開くに至れり。此間、韃靼人及土耳其人の歐洲侵入は、亦亞細亞内部の交通より餘波を歐洲に及ぼし、露土兩國亞細亞臭味の所縁となれり。

中世の末、近世の初、人間活動の中樞は既に宗教を離れて漸く合理的活動に向ふ、其一着は夙に交通に顯る。是[八一]に於いて大洋交通の事、新に起り、西、新大陸との交通、及歐羅巴と南亞細亞との海路交通、乃ち開け、乃ち亞弗利加大陸の檢出あり、大洋の探檢發見相踵ぎ、遂に歐人太平洋の發[八二]見となり、乃ち世界週航の實現となり、交通域は茲に始めて世界大となるの規模に達し、而して交通發達史は茲に一轉して最近期、卽世界交通の時期に入る。

凡そ東洋に在りては、國、先つ存して然る後、諸國、交通を開き、歐洲に在りては、既に密邇せる交通圈域の裏に於いて各個の國民社會は成り出づ、兩者の間、交通發達の踪蹤自ら其體貌を異にす。

第十節　世界交通

近世交通の發達は先つ歐洲民族の擴衍を現す。歐洲民族は、一方、亞弗利加を回航して印度洋より南亞細亞及東印度諸島に至るの交通路を開き、他方、大西洋を横きりて

八〇　サラセン人は亞剌比亞の中央に一個の宗教的中樞として興隆し、亞弗利加に出で、其北部を席卷し、進みてジブラルタルの海峽を渡りて西班牙半島に入り、宗教的開拓的軍事的交通を刺比亞に齎し、同時に西歐の文化を遡らしめ、又、風土的制度の濫觴に於ける大學を供せり。トゥウルの戰は、其進路を遮斷せらるゝや、東方に向けて突進せしめたるものにして、乃ち亞細亞支那印度乃至亞細亞内地に至るまで、其交通の進路は基督教の能く供せる地域に於ける、毎に好戰的なる教徒の毎に對して、所謂十字軍なる名を與へたるものにして、其人民族の配下に置かれたる細亞細亞の土耳其人の成功。

八一　コロムボ及葡萄牙人の航海に於ける發見

亞米利加新大陸を發見し、茲に近世初頭に於ける其遠征活動の舞臺を得たり。

此活動舞臺に於ける當初の演者は西班牙葡萄牙にして、[八三]之に次げるは和蘭なり。更に次いで海上權力の首腦中樞たるべき運命を有せるは英吉利にして、其地位や確實を加へ優勝を增し、以て第十八世紀の終に馴致せり。[八四]尤も晩く海上交通の競技に加はり、遠征拓植の果實を獲むと擬せるものを佛蘭西とす。之を西歐近世交通發達の第一期、拓植交通時代と爲す。各國は、自個文明の分枝を先づ派遣し置き、更に此と相交通するに止まるが故に、交通範域の擴大に比して、其世界文明の發展に寄與すること頗る小なるを免れず。且其向ふ所の地、多く未だ儼然たる國家

八三　國民社會の結成といふ大事業なる、最も夙く經營し且つ成功せる地理的關係と、中海と大西洋恰も海間位置に時代より行はるる密邇せる西洋時代に移りよりの大關係に在りしの東西の地位にるの、是れ葡國の西の兩國の先輩なり。此活動は、所以なり。

八四　英國は、蘭に（一五八八）アルマダ襲來の後に、逐に克ちて、是に海上に（一六五二）角逐して、後に和蘭と勢を占めに後優優の戰力を爲す。

八五　英國の勢力は、獨り精神的に安定して、群を拔き、其國は、偏に主として、其餘は、得て、歩を維持し、佛國の地を、佛國は、志を得ざる、齎の西葡の、親なる、漸く呈し、日々に、暉の、落つ。

社會を成すに至らざるが故に、政治的活動も亦之を見るに由なし。

第十六世紀は拓植の創業時代なり、第十七世紀は各民族の拓植競爭時代なり、而して第十八世紀に入るに及びて其間の優劣勝敗漸く判れ、[八五]植民地社會は所在統整を成して、有力なる社會體制次第に生成し、而して其尤も完全なる發達を遂げたるものより次第に獨立の擧に出つるを致せり。其第一着は北米合衆國、次には第十九世紀に入りて、南米諸國、墨是哥の獨立あり。舊大陸に在りて、南弗、濠洲の英吉利植民地の如き、漸く自治的政治體制を瓶建せるも、未だ獨立を企つるに至らず。凡そ植民地の獨立あるや、經濟的交通は進みて政治的交通に至る、唯文化の上に

は特に言ふに足るものなし。

近世世界交通の第三期は歐力東漸時代なり。此期を劃するの尤も著大なる事件は、一に太平洋の發見なり、[八六]二に西比利亞の檢出なり。[八七]是れ實に世界交通路の大なる發展にして、乃ち歐人が、植民地若くは其獨立に成れる社會を對手とするより、進みて舊國家既成社會に向うて交通を挑むの氣勢を作成せる所以の大轉機を供せるものなり。歐力東漸の勢は、其主なるもの、四條の進路に由れり。印度を本據とせる英吉利の活動、これ其第一進路なり。[八八]露西亞が西比利亞より東亞を壓迫し來れる、是れ其第二進路なり。[八九]北米合衆國が太平洋を經て直に日本を干せる文化的交通の開始は、是れ其第三進路なり。[九〇]而して東南亞細亞の

八六　一五一四年ポルトガル人が初めて太平洋を見たり。一六一三年班牙人バルボアが始めて太平洋を望見せり。其後船舶の太平洋を航行するもの、年に一二に過ぎざりしが、一五六四年に至りて始めて太平洋を横ぎりて、西南に向ひ、一五六五年に至りて始めて太平洋を横ぎりて、東に向ひ、一五七〇年に至りて始めて太平洋を横ぎりて、西に向ひ、一五七〇

レグサンドル、ドロポトキン、及支那、東京、滯支、露支、交南、交東、京安、南京、東保、護國、次第に、堪羅の、東境、亦次第に、壓迫なる、蒙雲、南貴州、方面より、支那、亦佛國の、壓力なる、感ず。

餘年にして政治問題の解決成り、對外問題、亦二十七八年及三十七八年兩戰役を以て茲に具體的解決の歩を進むるに至れり。而して老大帝國の實力、一たび世に明なるを致し、列强は支那を以て與し易しと爲し、爭うて指を其經濟的大鼎に染めむとせり。是に於いて覺醒の曙光、亦始めて斯土に閃き、北清事件の反撥運動となり、竟に帝政倒滅の大革命事變を惹き起せり。支那の覺醒は土耳其、波斯、及印度に其影響を及ぼし、惹いて露西亞も亦此に前後して一種の覺醒を成せるが、竟に世界戰亂の最中に於いて支那に遜らざる大革命を成し、而して世界や此戰亂を以て實に其交通の第五期に入る。

東洋と西洋、此二大交通圈は漸く融會し、覺醒し吐呑し、修養し對抗し、而して未曾有の戰亂を以て、世界を以て世界とするの眞義茲に十分の面目に於いて揭げらる。今や世界は西洋を意味せず、亦單に東洋を意味せず、世界は西洋の世界にあらず、亦實に東洋の世界にあらず、世界は東洋と西洋とを含み、東洋と西洋と兩立して、長短相濟し、有無相賴り、相輔け相和して以て世界其者の料理に任ずべき所以、茲に十二分の分明を見るに至れり。

是に於いて、苟くも人跡の到る處、世界孰れの部分、孰れの地域も、世界人類の交通域ならぬはなく、世界人類は始めて茲に一大交通圈を成すに至り、渾一體としての世界、人類は、有史以來、始めて茲に成立を告ぐ。是れ社會文明の一大事件にして、而して實に歷史の一大結節なり。

交通發達の史迹の裏面に貫流して、交通の方法的發達あり。今之を種類によりて類別すれば、左の三類に歸す。第一は陸上交通にして、其一を道路交通とし、發達や尤も軍事的遠征に負ふこと大なり、其二を鐵道交通とす、共に軍事的及經濟的二面の用を成し、後者は殊に近時世界の局面を一變するの大なる影響を成せり。第二は水上交通なり。其別類に水中交通なれど、交通の用に於いては殆ど言ふに足らず。第三は卽ち特に三廣袤に於ける空中交通にして、其將來に於ける發達は測るべからざるものあり。九二

九二　交通の方法的發達を縱の分類によりて考察するときは、人力、動物力、河川、海上、運河、鐵道、大洋、電力、空中の九期なる成すこと、本著第三篇第一章第五卷第三節に詳なり。

第十一節　人間の開展、世界前史及世界史

人間は、一には人口の增殖に於いて、二には交通の發達に於いて、有史以來斷えざる開展を成し來れり。人口增殖して人間は其量に於ける增大を遂げ、交通發達して人間は其內的關係に於ける發展を成す。人口增殖は人間の開展に於ける係數的關係を有し、交通の發達は人間の開展に於ける指數的關係を有す。而して人間の開展を通してこれと表裏を相做す所の著大なる事象は、實に神位の衰弊なりとす。

人間の中樞は、其初、世界の各處に互に相知らず相通ぜざる衆社會に於いて存せしが、漸く相通し相知りて、竟に今日、坤圓球を擧げて一の大なる團聚と成すに至れり。其來歷を尤も具體的に語るものとして、右、人間衆中樞の一たる、歐洲社會の具體的世界觀の進遷發展を表示する、世界地圖の變遷を覽むか、思半に過ぐるものあらむとす。

歐人の世界として認めたる所のものや、當初は實に地中海沿岸及北海附近の小區域に限られ、斯くて第十四世紀の末に及ぶまで、歐人の有する世界地圖は、此小區域以外、悉く黑闇の慢幕を以て鎖されたり。當時大西洋の彼方には、永久の大なる瀑布ありて、海水は地獄に向

うて顧えず落下するの迷想も行はれしが、第十五世紀の末に及びて發見時代乃ち至り、歐人の具體的世界觀、茲に絶大の革命を經るに至れり、而してコペルニクス、ガリレオ、ジョルダノ・ブルノ等の犧牲を出し曩に第五世紀に於いて、窈窕たる而して精悍なる女科學者ヒパチアに於いて竟に未だ獲られざりし犧牲の報償は、茲に始めて生じ來るを致せり。天動説に代れる地動説は、實に發見植民時代の精神的一大副産物にして教會の權威を墜し、宗教の聖權を墜し、乃ち以て神位の低下に向うて一槓杆の作用を成せるもの、犧牲の慘烈は適〻以て此説の公行より生ずる、神位の蒙るべき損害の如何に大なるべきかを明徵するもの。夫れ神位の鼎一たび其輕重を問はるるや、人心の桎梏俄然として茲に解け、各種宇宙現象に向うて、自由討究は競うて茲に試みられ、ティコブラアヘ、ケプレル、ニウトン、ラプラアス、ヘルシェル[九三]の天體研究に於ける、ハルヴィイ、ハンタル[九四]の人體研究に於ける、パスカル、ライブニッツ、フランクリン、ダラムベエル、ガルヴァニ、ファラデイ、ヘルムホルツ[九五]の自然界研究に於ける、プリイストレイ、ラヴォワジエ、デヴィイ[九六]の化學

九三
Tycho Brahe 1546–1601
Kepler 1571–1630
Newton 1642–1727
Herschel 1738–1822
Laplace 1749–1827

九四
Harvey 1578–1657
Hunter, William 1718–83
John 1728–93
解剖學の大家は此弟なり。

九五
Pascal 1623–62.
Leibnitz 1640–1716.
Franklin 1706–90.
D'Alembert 1717–83.
Galvani 1737–98.
Faraday 1797–1869.
Helmholtz 1821–95.

九六
Priesley 1733–1804.
Lavoisier 1743–94.
Davy 1778–1829.

九七
Linnaeus 1707–78.
Cuvier 1769–1831.
Humboldt, A. 1769–1859.

研究に於ける、リンネウス、キュヴィエ、フムボルト[九六]の博物研究に於ける、皆是れ近世二百年間に於ける、人間思想革新の産物なりとす。乃ち近時及現代に亙りて頻頻續出する凡百科學及其應用上の發明は皆是れ是等前代の衣鉢を承けて而して之を完了せるものに過ぎざるなり。

是時に當り、宇宙現象に關する具體的知識の發達と相伴うて、人間の自覺は亦必ずや熾盛且明確透徹せるものなかるべからず。自覺は外界知識の反照たり、人間の意義は、外界宇宙の知識の發展と共に進暢し、而して神秘といひ祕奥といひ不可思議といふものの意義も範域も大に變遷す。蓋し所謂神秘現象の、範域の減縮や、縱令さまで言ふに足るものなしとするも、神秘現象の、人生に對する意義は、近代に於いて實に重要なる變遷を經たるもの。曩時の神秘は司配的神秘なりき、統制的神秘なりき。人は神秘の前に絶對的空位を有するのみ、翻りて神秘に賴りて智的情的乃至意的の缺陷を補はむと擬す。神秘は其質の超絶的不可通的なるに拘らず、直に宇宙の根柢を以て擬せらる。

是れ今日に於いて、苟くも常的發達を成せる人間思想の、一見直に論理的不整合を認むる所、而して曩時の半開的思想の、因襲依違して毫も怪むを做さざりし所たり。今や神秘現象、不可思議現象、亦猶迹を人間に絶てるにあらず、而も神秘や、毫も神の秘奥にあらず、唯人の思議に堪へざるのみ、人にして適當なる器官を具へ、若くは適當なる官能の運用を做さむか、次第に人の思議認識の達する所と爲るべきもののみ。神秘去りて不可思議殘る。不可思議は何等人間に對する統制力、司配力を有するものに非ず。斯くて外界宇宙の知識の進捗は人間の自覺を促し、人間を司配するものは人間なり、不可思議の奇貨に居ける神位は、今に於いて人間の存立發達進歩の根抵より消え去れり。是れ實に人間發展の歴史の一大結節たる、今代と前代とを分つの一大事象にして、而して我社會學の鼻祖オオギュスト・コムトや、實に夙に此人間の發展、世運の開達の必至の機運を看破し道破せるもの。コムトの箴言に曰はく

今や神は滅沒し、而して人は代りて登臨す。

九八

第十九世紀に在りて乃ちまたリヴイングストンあり、セシル・ロオズあり、ナンセンあり、第二十世紀に入りて更にシャクルトンあり、而して人の足跡、今や事實上、世界各地に到らぬ限なきを致せり。

人間の活動は世界を開拓し、歴史の頁を遂うて、有形に、無形に、其日就月將の跡を留む。[九九] 凡そ今日、坤圓球上、苟くも人の足跡の印する處は卽ち交通の至る處、世界を渾一的人間社會として。各其部分を成す處たり。今日に於いて、全世界は漸く既に大なる意義に於いて一大社會を成すに進めるなり、今より以降、全世界は一大渾一社會としての取扱を受くるを得るに至れるなり。然れども斯の如きは眞に最近の狀勢のみ、現時に於いて僅に端を發せる事態のみ。第十九世紀の後半に在りて、世界は漸く東西二洋の互に相知らざる兩區域たるまでに進めり、第十六世紀の初までは、東西兩半球は全く相知らずに經過せり。時代を遡るに隨うて斯の如く、之を概するに、世界の各處、各個の

知らず相關せざる衆小社會の存立より世界の歴史は始まりて、竟に世界全般を以て一大社會を構成しつつある今日の現狀に至れるもの、而して眞正の世界歴史は茲に始まる。

夫れ世界の大勢は、第二十世紀に於いて、斯の如き一大轉機に遭遇し、世界に於ける各國民存立の意義始めて茲に重要なるを致せり。從來、史家、往往上古、中古、近世、最近世の四大期を分てども、是れ今に於いて世界の大勢に通ぜざる陳套を襲ふの陋見と謂はざるを得ず。現時世界大勢の大なる進轉を以てすれば、ナポレオンは中世の人物たり、ビスマルク、グラッドストンは近世の人物たり、而してロオズヴェルト、キルヘルムは近世と最近世との過渡期の人物にして、ツェッペリン、ライト、シャックルトン等は實に最近世劈頭の人物にあらずや。蓋しこの新たなる意義に於ける最近世史を以て、實に眞正の世界歴史はその第一頁を開くもの。第十九世紀の終、日露戰役の始に至るまでの、所謂世界歴史は、僅に唯眇眇たる歐西史、支那史、日本史等地方歴史の集合たるに過ぎず、如何なる史事に賴りて、如何なる體系を作り成さるとも唯是れ世界前史、卽ち世界の神代志、創世紀、若くは胎生學を以て呼はるべきものたるに過ぎざるなり。是故に、今日までの人類社會は、實は未だ曾て眞正の意義に於ける世界の人物を產せしことあらず、世界の未だ成らざる、竟に世界の人物あるを得ず。而して今や世運は一轉せり、地方は轉じて世界に入り、世界前史は頁を翻して世界歴史に入り、國民的地方的文明は、渾蕩鎔冶、以て眞正の世界文明を化成するに進まむとす。[九九]哲學、宗教、政治、經濟すべて在來の偏小草味なる地方的臭味を擺脫して、眞正健實なる意義に於ける世界的光彩を陸離たらしむべき必至の運命は、今や唯此新時代の自覺を有する世界的新人物の來りて此に手を下すを待てり。

世界史は今日に始まる。世界前史や實に世界の神代志のみ。世界前史と世界史、兩者の標徵は何ぞや、世界前史は

九九　從來謂ふ所の「世界文明」は「世界史」と同じく、僅なり「世界的」宗教、「世界的」文學、「世界主義」、悉く皆、これ僅のみ。

人間を介する神位の歴史たり、而して世界史は實に人間其者の歴史たるなり。

第三章　文明の概評

第一節　緒論

文明の義解を論定し、社會進化の史蹟を大觀す、乃ち從來存立の文明を概評して、以て社會動學の實地經綸との關鏈を完成し、以て吾人今日の社會的自覺に資するあらむと擬する、可なるに幾し。

從來存立の文明と謂ふ、其系統の複雜にして多岐なる、僕を更へて尚計度觀測の容易ならざるに似たるも、眞正世界歴史の開卷に迨はざること一歩なる、輓近世界の現

狀に就いて看れば、此百系千統は、漸く隨時隨處の統整を來して、今や文明の二大系統の世界に存立するを見ずんばあらず、一は則ち歐西文明にして、一は則ち東洋文明なり。今人間文明の造詣に對して概評を試みむとする、亦此二綱の標題の下に於いてするを當然とす。

人間文明の造詣、現代文明に對する論評は、社會問題の概觀より入るを適當とす。

何れの世、何れの國にも、其社會を謳歌し若くは其時代を呪咀する者なきはあらずと雖も、現時第二十世紀の歐西諸國の如きは蓋し罕なり。惟ふに世運の開展は中世よりして近世に移り、近世よりして最近世に至り、最近世よりして更に輓近の十年期に進むに於いて、急轉直下の勢、宛も巨石を峻坂に轉ずるが如く、人をして應接に遑あらざらしむ。斯の如き時勢に際して、一方に現社會を謳歌して及ばざらむを恐るる者あると同時に、他方に現時代現文明を呪咀して唯到らざるあらむを患ふる者を見るは自然なり。

一　埃及、アッシリア、細亞、西亞、歐羅巴に淵源せる古代社會の文明は、一系統の前面に聳ゆる大成し、其衰廢に於いては、更に古代文明の承繼者たる基督教文明と結合せる近世歐西文明を成せり。

印度又は西亞細亞の古文明は、太古の若干の亞細亞の關係あるべきと眞に支那の文明の系統なるの至らしむ。這種の文明は、全く兩系統の文明入り流れて日本固有の文明の東漸、洋文明の導入、冶鑄、文明の啓明、以下今日に至る。

二　哲人は往往庸衆に先たちて天下の幾微を慮す、恰も烏の如く雷鳴の如し、故に Konzeau は百數十年前、世運が一轉して最近世の變革に入らむとせるに際して、風潮の新文明、社會痛會、既に新傾向に對する激なる呪詛を試みたり。近世の Hokoi、Nordau の如き亦事前に流亞なるも、之を哲人的資格は、知ちの徴なり。此資格を十二分に具へて、呪詛と評と、進みて經論安居せず、積極的根抵の上に、政策實行を樹立せるが Comte なり。

批評の向ふ所は得失長短の存する處、批評の兩端の距離の濶大なるは、事物の性質の複雜を表する所以、現時の社會文明が其裏に現在生活する人衆によりて這種の批評を敢てせらるるは、卽ち其實に複雜多角なる性質を有するの標識たり。而して所謂社會問題なるもの乃ち生す。

抑、社會問題や、何れの世、何れの國にも、多少その存立を看ざるなし、特に稱呼を此に取らざるものも亦比比として是なり、唯其微微たるに於いて、社會人心は甚だ意を此に注かず、其極めて著明なる一二の部分が、時に政治問題宗教問題等の名目を取りて現るるあるのみ。然るに現時の歐西社會や、實に社會事象の衆方面に亙りて重要なる批評の題目を供へ、其一を擧ぐれば其二に觸着するの已む可からずして、彼此相關連して以て一個の複雜なる問題の聚團を提供す、此聚團や卽ち所謂近世社會問題を成すものたり。

先づ主として眼を歐西現代の社會に注ぎ、其中樞現象を社會問題に於いて觀察し、而して眼前に髣髴し來る所の歐西文明の性質を把握するに於いて、微妙にも、此と補角的關係を有する東洋文明の性質は、多く力を費さずして亦現前し來らむとす、此章文明の概評を試むるに際し、先づ近世社會問題の概觀を成す所以なり。

第二節　社會問題

社會問題とは何ぞや、今分析的に社會問題の概念を吟味すること左の如し。

○第一。社會問題は問題なり。

問題は、解釋を要して而も未だ解釋せられざる命題なり、之を客觀的に言へば、該命題が指示する所の事實なり。問題には、學術的に研究せらるべきあり、又之を要せざるあり。凡そ複雜難深なる問題は、甲に屬し、而して社會問題は其隨一に居る。然れども問題は科學に非ず、問題の一轉して科學となるには、一に解釋の規模の確立なかるべからず、卽ち問題解釋の可能、方法、範圍、及方嚮性質の明確となれる以上に在らざるべからず、二に解釋の根抵的部分の既に遂げられたる以上に在らざるべからず、今社會學は固より既に一個嚴然たる科學を成せども、所謂社會問題は未だ容易に上述二項のいづれをも具備するに至らず、卽ち社會問題は問題にして學術的研究を要するものなれども、未だ科學たるの地位に達せざる、一の問題たるに外なる能はず。[三]

第二。社會問題は社會的問題なり。

社會問題は個人的問題にあらず、また非人的若しくは超人的、卽ち自然的若くは神學的問題にあらず、社會問題は人的問題なり、而して社會に屬し、社會に於いて存在し、社會に由りて解釋せらるべき問題なり。斯かる關係を社會に對して有する所の問題なるが故に、之を社會的問題と謂ふ。[四]

第三。社會問題は社會渾一體に直接に關涉して存立す

是故に法律經濟等の科學せざるべからざる事項は、既に解釋せられたる事項に屬し、而して解釋せられざる事項は、社會學問題に屬せざるべからず。

社會學問題は、社會學に屬する事項に關し、其關係する所の事實なり。問題には、學術的に研究すべき事項と、公衆の衛生に關する事項とあり。然れども問題は、解釋せられざる事項なり。

○第四。道德の標準如何

道德の標準は、之を良心の命ずる所に委ねしめざるべからず。社會個人的問題にあらざるなり。道德の問題は、社會的認念に於いて觀察せらるべきものなり。

美術の對象、美術の對象は、文學、美術、演劇、往往社會に於いて存在するものなり。美術の判斷は、社會に於けるも美不美の如き、社會に於いて存在するものなり。

る所の問題なり。

社會問題は、社會の特殊なる機關を介して間接に社會に關渉する所の問題にあらず、社會の部分に偏局して存立する所の問題にあらず。社會問題は社會其者の問題として具ふる所なり。社會問題は社會全般の問題なり。[五]

乃ち社會問題は、左の如く之を義解すべし。

社會問題とは、社會渾一體に直接普關する問題のことなり。

斯かる問題が社會的問題たるべく、且複數なるべきは明なり。

然るに、世間に謂ふ所の社會問題なる語は、往往更に狹義に用ゐらるるの例なしとせず。其義解の嚴正なるは得て聞くべからざれども其包含は經濟的社會問題、殊に所謂勞働問題と相一致するものに似たり此意義に於いて此名稱を用ゐるは、社會主義が社會といふ語を含有すると同意味なるが如く、必ずしも牽合の弊を認むべからざれども、經濟的社會問題と同樣の意義、同樣の關渉を社會に對して有する衆問題の現存するに於いては、其衆多を概稱して社會問題と呼び、經濟的社會問題の如きは、特殊の稱呼を附して說述するを便且妥とすべし。殊に輓近、社會といふ語の意義が、社會學の新面目によりて明晰且的實となれる以上、社會問題の包含も、亦此廣義に就くを必至とするに至れるなり。社會問題に廣狹の二義ありとせば、其廣義を以て正徑と爲すは、斯かる根據に基つく。

社會問題や、有史以來未だ現時の如く盛なるはなく、未だ歐西諸國の如く其解釋を求むるの切なるはなし。社會問題は、社會渾一性の發達に應じて、實に近世的存立の性質を有す。

古代文明、古代社會に在りては、社會の渾一的存立未だ完からず、乃

[五] 戰を宣し和を講じ、法令を布き豫算を定むるが如きは、それ〴〵社會の特設機關に屬する事項にして、是等は社會的問題にあらざれども、社會的問題にあらず。社會に於ける某階級の問題、若くは某地方の問題の如きは、該階級若くは該地方が社會渾一體として存立する限は、社會問題たるを得ず。

にしたがつて解釋せらるべき問題にあらずして、乃ち社會問題とならず。

ち社會的自覺の渾一的心意現象不完全に、且社會體制の渾一的制度現象亦不完全なり、社會の存立は、無形有形の兩面に通じて尙不完全を免れざるを以て、社會的諸問題の存するあるも、實に或は間接、卽ち機關內部の問題たり、或は特關、卽ち階級又は地方の部分的問題たるを免れず、況や這般の社會的諸問題も、亦實は其存立を見ること太だ罕なるをや。蓋し當時社會に於ける個人殊に偉人の勢力甚だ大にして偉人の現否はやがて社會の興廢存亡を決するの勢あり、卽ち社會的問題として存すべき事項は、やがて斯個人の方寸に於ける問題に淪沒し、卽ち個人的問題ありて社會的問題なきの實狀を現するなり。是故に社會問題は、本質上旣に近世的なり。殊に近世文明の發展、世運進遷の急劇なる最近一世紀の史蹟、世界史發軔の大時機に際せる現時世界の大勢は、更に歷史的事實的に社會問題をして近世的ならしむる所以の要因を供せり。古代に社會問題なきにあらざるも、社會問題は近世特に重要なる面目を爛發す、近世社會問題の取扱が、特殊の地位を學問上に要求する所以なり

第三節　社會問題の綱目

社會問題は多端なり。問題は渾一なるも、其下に若干の綱あり、各綱の下更に若干の目あり、彼此連絡、相互糾纏、以て其複雜なる一體を成す。

試に眼を放ちて現下の文明社會の實勢を觀よ。各種の制度は秩然として備り、凡百の文物は燦然として目を奪ふ、宗敎は數千年の權威を擁し、敎育は日進月步以て文明の新生氣を皷吹し、科學及其應用は億兆人衆の生活を善美より更に善美に進め、交通の發達は世界の一隅と他隅とを連絡して協同利益關係の一大體系を成す。凡そ人間社會發達の盛況は、有史以來未だ今日より盛なるあらず。而して此燦然秩然たる社會文明の基底に於いて、誰か想はむ振古以來未だ會て聞かざる所の難深なる複雜なる怪詭なる危險なる社會問題の暗流の

奔激するあらむとは、試に現時文明社會が當面の問題として逢着しつゝ而も猶末だ其解釋の端緒を把握するに至らず、切切として苦勞し、齷齪として煩悶しつゝある事態を看よ。

第一、經濟問題。貧民の增殖、貧を訴ふる聲の高大は、貧富の懸隔の事實より來り、茲に所謂貧民問題[六]を生ず。近世的產業組織の發展は大工場を叢生し、大農制の傾向を生じ、雇主たる資本家營業者と勞働者との關係の適當なる規定如何の問題は、茲に所謂勞働問題[七]を生ず。勞働が細民生計の唯一の規定たるや、婦女若くは小兒も亦家庭に籠居して適當の業務に當り適當の敎養を受くるに堪へず、相胥ゐて工場生活に赴くや、茲に勞働問題の重要なる支流として、女工問題及幼工問題を生ず、是等は更に風俗上及敎育上衞生上の意義を伴ふ所の稍、複雜なる問題を形成す。輓近經濟社會の變遷、產業革命と謂ふ所の現象に逢着して、根本的改革の議論は、所謂社會主義者の口より出でたるが、其尤も主眼とする所の根本革新論は實に財產權に繫りて存す、卽ち私有財產制は文明の公道に於いて認むべきものなりや、共有財產制を以て私有財產制に換置するを至當とし又必至の社會的運命とせざるや、の問題は、茲に所謂財產權問題として現れ來れり。財產權問題幾分の解釋として相續稅の問題あり、又所得稅の問題あり、國家財政の必要事項としての以外に、社會問題としての租稅問題は、更に根本的解釋を要求しつゝ現れたり。輓近社會主義的運動の動機は、一は實に奢侈の增進に存す、

六 Pauperism.

七 Labour Question.

而も奢侈未だ必ずしも常に經濟的墮落を意味せず、且奢侈の正體は抑、何者ぞ、奢侈問題は亦風俗道德上の意義を伴ふ所の稍、複雜なる問題を形成す。凡そ上の如き數目の問題は、皆是れ近代經濟の發展より生じ來る所の問題の簇聚に於ける各部を成し、此簇聚卽ち概括して經濟的社會問題、約して之を經濟問題と謂ふ所のものなり。

第二、人口問題。人口統計は、古代に在りても全く之なきに非ざりしも、近時一世紀の間に長足の進歩を成し、各文明社會は、自個の有する人口及其動態について頗る精確なる自覺を有するに至れり。而して輓近經濟の發展を主とし、近世的社會に於ける各種の事由は、兎も角人口增殖の著明なる趨勢を事實上に伴ひ來れり。八斯くて所謂豫

八　這般の事態を痛切に言明喝破せるは Malthus なり。

防制の慘苦を免れむとせば、提供せられ得る一の方策は植民に在らざるべからず、植民や內外兩面に向うて種種の社會的諸問題を喚ひ起す、是に於いて植民問題在り。而も亦他方、文明の一面現象として人口減衰問題の現るるあり。九且近代一般の趨勢は、都市及村落人口の不權衡なる動態にして、此事態や惹いて經濟、風俗、人智の開發、國家社會の隆替等に大なる關涉を及ぼす基因となるもの、所謂都市問題の基調たる都市村落人口問題は、更に別に重要なる一大問題として現れ來る。凡そ此の如き數種の問題の簇聚は、卽ち所謂人口問題を形成しつゝあり。

第三、人種問題。人種は社會の規定の一として、古來重要なる效果を各個社會の性質に及ぼし、各個社會相互の

九　新マルサス主義、Neo-Malthusianism これと相關聯す。

關係は、人種の異同の爲に、親疎、又は融和若くは軋轢の因となるの尠からざりしが、其根柢が自然的なりや將た心意的なりやの疑問は暫く之を措き、今日社會事象に於ける意識的乃至理想約制約の發展せるに於いても、人種に由る社會關係の變調は依然として其勢を減せざるのみならず、輓近世界交通の發達、社會觸接の頻繁を加へたるが爲に、這般の事象亦益〻繁きを見るに至れり。初め歐人が尤も直接近密なる交渉關係を有せる異人種は實に黑人に在りき。[10]爾來黑奴の使役は、殊に新大陸開拓の重要なる要素となり、第十九世紀の中葉に至りて、尙此惰性の司配の下に在る地方と、新思想の實地活動を防障するに當るの經濟的物質的利害關係を有せざる地方との間に紛議

10 葡萄牙の王弟 Dom Henrique 親王の保護の下に派遣せられたる亞弗利加西洋沿岸探檢航海の進行、遂に喜望峰を見るに至りしが、印度洋に發航し、路の發見なりしも、亦其目的は全く黑奴の捕獲機動に在りしものとなせらる。

を生じ、玆に南北戰爭の慘劇を演じて、黑人の解放乃ち起り、爾後敎育、政治、其他の社會運營に於いて黑人の地位の保障何如は、繼續せる一聯の永き社會問題を形成す、是れ卽ち黑白問題なり、米國に於ける土人卽ち米印人と稱する赤人が、白人の侵入によりて漸次或は變態、或は衰滅の運命を趁ふに至れるは、尤も著明なる一事態なるが、此種の事、所謂文明民族が其植民政策を實行するに際して殆ど每に見る所、規模の大小は差等あれども、濠洲に於いて、亞弗利加に於いて、馬來諸島に於いて、南洋衆群島に於いて、乃至我北海道樺太に於いて亦實に目覩する所の人種的現象は、亦皆此種に外ならず、乃ち其尤も著明なるものについて、呼ひて赤白問題とするを妨げず。第十九世紀の

中葉、東西兩洋の文明民族の觸接に於いて更に激烈にして大規模なる、所謂人種的現象は起れり、其無意識的自然的なりや、將た意識的、就中政略的外交的事象なりやは、更に精密なる事實的考察を要すれども、東洋民族が西洋民族の侵襲を目するや呼ふに白禍を以てし、西洋民族の東洋民族存立に對して言を構ふるや呼ふに黃禍を以てする、所謂黃白の關係問題は、古來人種に關係を有する社會的諸問題の尤も大規模にして慘烈なるものとす。斯の如く諸、の方面に亙り、多くの年所に亙りて由來を有する問題の簇聚、卽ち呼ひて人種問題と做す所のものにして、或は以て社會研究の骨子と爲す者すら之有り。

第四、國際問題。　人種問題の一部と親密なる交渉を有し、輓近衆國社會の交通觸接の繁密となれるに連れて、國際の摩擦は種種の形式に於いて現れ來る。乃ち政治的若くは法律的の葛藤となりて現るるあり、外交談判及國際法の裁理を竢ちて解決せむと擬するも、往往其竟に失敗に歸するに於いて、鐵火に由り强力を用ゐて紛爭を解決せざるべからざるに立至ること尠からず、是に於いて軍事存す。軍事に顯潛の二樣あり、其顯は卽ち戰爭にして、其潛は卽ち武裝的平和なり。軍事の二樣若くは外交的裁理、其孰れを執るに拘らず、國際の摩擦に由りて衆國社會の浪費し損失する所の殆ど貲られざるや、玆に國家統合、國際社會瓏建の問題起る。就中衆國社會の一が超群の發展、絕倫の增大を遂ぐるに由りて此を成すべしとし、隨うて

11 Gumplowicz: Der Rassenkampf. Lapouge: Sélections sociales. 此兩著の知きは、社會發達の關鍵を此に見出さむとするものに似たり。

自國を以て此に擬するものは帝國主義となり、宇内の衆國社會の調和、均等の發達に由りて世界を一丸とし、秩序ある大社會の成立を期するものは平和主義たり。平和主義は、其當面の事業として、戰爭を禁遏若くは輕減せむとす、而も如何にせば這理想に、一歩たりとも近つくべきかは、輓近に於ける社會的大問題の一たり。凡そ是等は卽ち國際的社會問題、略して國際問題と謂ふ所のものを成す。

第五、宗教問題。宗教は、人類社會ありて以來、殆ど毎に之を見る所の古き社會事象の一なり。以て社會成立の楔子と爲すの關係に於いて密接と否との差等は免れざれど、宗教の存立ある所、そが社會餘他の衆事象に影響するの廣く且深きは明白なり。然るに、社會文明近世の進運は、殊に歐西社會に在りて至上の權威を有せし其固有の宗教に對して、頗る懷疑の態度を取る者を生じ來れり。況や輓近世界交通の發達より、戰爭に、平和に、東西兩洋の衆民族社會の觸接の緊密となれるや、歐西に在りても、自個の宗教以外、此に對立する價値を有する幾系の宗教あるを認知するに至り、輓近思想界の歸納的事實的研究の態度、自由討究の精神の隆興に乘じて、先づ宗教の存立及發達の問題を起し來れり。宗教の存立には如何の根柢あるか、社會の變遷進動に連れて此根柢には如何の增減あるべきか、此根柢の增減に連れて宗教の開明社會に存立し發展し得るの條件如何の問題、卽ち是なり。是れ實に歐西の社會人心に取りてゆゆしき大問題にして、從來、神聖にし

て犯す可からず、思想の鋭刄も一毫の加ふ可きなしと思惟せられし所に向うて根本的批評討究の加へらるるに至れるもの。斯く宗教の根柢、既に思想界裡に動き來れば、數世紀來の宿題なる、宗教と政治との關係の問題、亦新なる光彩に於いて出で來らざるを得ず。而して宗教の社會教化に於ける統制の一大部面として、更に宗教と教育との關係の問題亦茲に新に起り來り、乃ち從來教育の基礎を以て目せらるる宗教は、却て或は教育の時代人文に率先するの發展を防障するの桎梏と看做さるるの危機を誘致し來れり。凡そ宗教が、社會の創始以來、人心の根柢を形成し、社會發達の源泉を供したる因緣の深厚なるに比例して、宗教に於ける這般の社會問題は、極めて社會秩序の動搖を惹く所以となれり。之を宗教的社會問題、卽ち宗教問題の內容と爲す。

第六、婦人問題。　近世思想の發達は、一面に於いて理想的平等觀を生み、他の一面に於いては事實的、寧ろ實理的差別觀を生めり、而して從來の獨斷的差別觀を併せて、茲に三段進化の一事例を供す。丙は正說なり、甲は反說なり、乙は合說なり。然れども、合說の成るに至るまでに、反と合との間、劇烈なる爭論を免れず。婦女の社會的地位に關して、正に這般見地の變遷あり、古來婦女は全然男子と不平等の地位に置かれしが、近時の自由平等の理想觀は、亦此事象をも照し來りて、茲に理想的婦女解放論あり、所謂女權論なるもの卽ち是。然れども是れ事實上急遽に實行し

一二
正 Thesis
反 Antithesis
合 Synthesis

Feminism.

難き事なるのみならず、實理的考察の上よりして頗る多くの缺點を見る所の誤れる見解なるに似たり。而して他は則ち此批評觀を目して改革進歩を阻害する姑息論と爲す。是に於いて所謂婦人問題なるもの起る。總して之を婦人問題と謂ふも、一面には從來婦女の社會的地位に應ずる婦女の教育の根柢より改革せざるべからざるを標榜し、之を問題として解釋を要求する教育的婦人問題あり。他面には政治上の權利及財産上の權利を婦女にも男子と同等に認むべしや否やを釋せむとする政治的及經濟的婦人問題あり。更に他の一面には、古來よりの事實にして、而も今者の婦人問題の生じ來れるに反映して殊に其解釋の急要を見るに至れる道德的婦人問題あり、風俗上の婦人問題卽ち是にして、其關する所、固より惹いて男子に及び、社會一般の道德に及ぶものたり。凡そ是等の婦人問題を以て、近世社會問題の第六類とす。

第七、犯罪問題。　文明の進歩は、或る點に於いて人を動物より遠ざからしむ、是れ或る意味に於いて人を神に接近せしむるもの、然れども文明の進歩は、他面に於いて犯罪を促すに似たる著き事象あり、文明の進歩に連れて犯罪の複雜巧妙に向へる、犯罪の件數の增減は明確ならずとするも、少くとも犯罪の減退が現代文明の誇揚に對して割合に著しからざると、犯罪の檢擧が文明の進歩によりて次第に巧妙を加へ、交通通信機關の發達に連れて益社會人衆の耳目を襲ふの頻繁を加ふるの傾向あるとの

爲に、世俗の往往犯罪をば近世文明の附隨產物なるが如く思ひ做すを致せり。而して所謂犯罪問題玆に生ず。犯罪を以て先天的なりとする見解は犯罪人類學[一四]となり、犯罪を以て後天的なり、社會環界主として此が要因なりとするものは犯罪社會學[一五]となる。而して犯罪を救治する、其方法如何の問題は、解釋の猶幼稚なる以上兩種の問題と相駢ひて、更に犯罪問題の中堅となる。犯罪問題を以て近世社會問題の第七類とす。

第八、階級問題。人權思想、自由思想の發達は、近世の著大事なり。教育と遺傳[一六]との關係は、近時益、學者の熱心なる考究を經、或る程度まで遺傳の忽緒に附すべからざるの明になりたれども、而も人の能力は、先天的に限定せらるるものに非ず、能力の趨向殊に然り、隨うて人人の職業、及之に伴うて人人の社會的地位の決して先天的に限定せらるべきものに非ざるの明白なるに於いて、社會階級は漸次社會に合理的存在を喪失するの運に向ふ。就中農民、軍隊及奴隸の階級は、夙に消滅せるもあり、現に消滅しつつあるもありて、社會によりて一樣ならぬまでも、其存立の問題は概ね事實の上に解釋を告けたるが如きも、獨り貴族の運命のみは、衆社會に在りて、猶未だ何程の解釋にも向はず、其存立の必至とせらるるに向うて固より確然たる積極的理由の立せらるるに非ず、其消滅を必至とする理由も、亦未だ疑を容るる餘地なきまでに明白とならず。而も經濟社會近時の潮流に連れて、上流階級の奢侈及

一四 Lon.broso は此見地の標本なり。

一五 Enrico Ferri は此見地の標本なり。而も兩者尙未だ充分獨立の科學を成すに至らず。

一六 Guyau : Education et Hérédité, Ribot : Hérédité 等を參看するも明なり。

惡德は、下層人民の嫉惡猜忌を惹き起し、而して貴族問題を中心とする階級問題は年年其聲の烈しきを致せり。次に又、所謂經濟的社會問題の解釋の遲遲たるや、職業階級に於ける勞働者及勞働希求者[一七]に於いて、新なる窮民[一八]の階級を生ずるの虞ありて、乃ち此義に於ける窮民問題は、階級問題の第二部を成す。之を要するに、高きを夷げ低きを埋めて、社會には職業的分化あるも階級的分化なきに至らしむるの可否及方法如何は、卽ち近世社會の第八類たる階級問題を成す。

第九、思想問題。　思想は個人心內の事なれども、社會の流行たるに於いて社會事象たり。現代の人心は思想に於いて著き不安を藏す。宗教、形而上學卽ち所謂哲學、科學、三

一七　勞働を求めて未だ得ざる者及失業者。

一八　Proletariat.

者いつれを根抵として思想の憑據を立つべきか、此問題に於ける不安は其一なり。見を立て身を處するに於いて、國民的か將た世界的か、其孰れに由りて進むべきか、此に於ける不安は其二なり。責任ある實行者は、名づけて之を臣民といひ、國民といひ、無責任なる空想者は、名つけて之を逸民といひ、騷人といふ、騷人、逸民は、特定の國、特定の時代、要するに時、處、位を逸脫する思想生活、思想行爲の生活を營まむと擬する者流なり。人の斯世に立つ、臣民を本義とすべきか將た逸民か、國民か倘くは騷人か、此に於ける不安は其三なり。西洋を以て其人間並に文明の正統と爲すべしや、將た東洋亦人間と文明とに參加するの資格あるものとすべしや、乃至東洋に生を享くるものは宜く東

洋を以て人間及其文明の正統と爲し、之を承け之を繼ぎ、暢へて而して之を達するを以て至當の天職と爲すべしや、此問題に於ける不安は、是れ思想問題の第四なり。凡そ斯の如き問題は、實理的示命夙に之を解釋して顯明的確なるも、既に宗教と形而上學と科學とに惑ふ者、此進めるを見地に對して尙暗中模索の陋に居る、復怪むを須ゐず。之を近世社會問題の第九類たる思想問題とす。

第十、革命問題。　初八類は、合理的根據ありて正當に解釋を要する問題たり、第九類は頗る時代錯誤に幾き變的問題たり、更に輓近の社會に於いて、看過を容さざる一類の社會的病的事象あり、是は社會改革の病的發作にして、彼無政府主義、卽ち無國主義、虛無主義、及此に比すべき危激なる社會革命主義、卽ち是なり。若し此に問題としての命名を試みむか、或は之を革命問題と稱す可し。凡そ斯の如きは、如上幾綱幾目の社會問題の叢生して、各解釋を要求しつゝ、而も其解釋の遲遲として甚だ進まざるに際して、解釋方法其者に疑を懷くが爲に傍生する不自然的事象にして、抑、亦之を近世社會問題の一隅に數ふるを妨けざるものなり。

一九　其中社會單位たる家を否定し絕滅せむとする無家主義を數ふべし

以上十綱の問題は、近世社會問題の尤も顯著にして主要なるものなるが、其皆近世社會に固有なる根柢關係を有する外、更に其大體の淵源を共通に有するに於いて、這般の十綱は極めて近密なる相互連繫を有し、十にして一、一にして十たるの性質を有す、是れ社會渾一體の本質よ

り來るもの、尤も注意すべき事項たり。

抑、近世社會問題の淵源や、之を精査せむか、是れ之を現代文明の性質に求むるの外なきも、一言之を蔽はむか、皆是れ近世社會の社會的煩悶の聲に外ならず。近世社會の各般の方面に於ける進歩は洵に目覺しきものあるも、其裡に大なる缺陷を存し不調和を存するは著明なる事實にして、就中其有形物質的發達と、無形精神的舊制度との間には、尤も耐へ難き不調和の新に益、其勢を增進し來るあり。物質と精神との不調和、是れ實に近世社會問題の根柢的性質たるなり。

今や進みて歐西文明の面目を大觀すべし。

第四節　歐西文明の價値

歐西の民衆は歐西文明の到達を以て文明開化最上の標本と思惟す、固より此世態其者を最上無缺と爲すに非ざるも、此文明の連續は益、此勢を以て世態の發達を來すべしと思惟し、敢て復文明其者を吟味し、其缺處を見出さむとは期せざるなり。今歐西文明を吟味して、此見解を批評せむとす。

今日歐西の社會、文明の振古以來未だ見ざるの境域に達したりとして、特に誇示し得る所の者は他なし、唯自然科學の發達に伴ふ産業の開展卽ち是のみ。

歐西に於ける自然科學は、數百年荒誕なる人間の空想的希望に於いて、錬金術及占星術に於いて其初期を充たしたるも、這般の事業は僅に偶中の發見を將來するのみ、中世當時の社會百般の事項と共に、到底人間開展の大勢を振作するに足らざる者なりき。乃ち歐西自然科學の發

達の始源は、實に二個の最も重要なる因緣を數ふ可し、第一は、希臘の哲學科學の講習に由れる人心の解放、是なり、第二は、亞刺比亞人に依れる學術技藝の播種、是なり。人心にして解放せられざれば、播種ありと雖も長育する能はず、播種なければ、人心の地味可なりと雖も美蔬の生育あることなし。

何をか人心の解放と謂ふ。歐西の社會は、中世の終に至るまで、思想の上に於いては耶蘇教の爲に繫縛せられ、社會組織の上に在りては封建制度の爲に繫縛せらる。其封建制度の繫縛以外に立てるは、自由市の勃興によりて解放の翹楚を得たるも、人心思想の繫縛は容易に之を脫却する能はず、漸く中世の終期に迨ひて、宗教的專制主義、其暴勢の衰頽を現すや、稍稍として希臘非專制社會に於ける學術技藝の講習、卽ち古學復興の潮流を生し來り、之に次いで乃ち新學興起と爲り、以て人心解放の素地を成し、乃ち教法改革の大變動あり、中世期末に於ける人心の解放は、玆に成功を告ぐ。但し此思想の解放は、有形的學術討究、及社會統制の上に於いては、之を完全に成就せるも、人間道德の根本理想の上に於ける解放は、未だ之を斷行するに至らず、卽ち當時の人心解放は、相對的にして絕對的にあらざりき。爾後三百年にしてオオギュスト、コムトあり、乃ち此絕對的解放に向うて絕叫せるも、竟に大に其功を奏するあるに至らず、而も其端緒は氏によりて開かれ、爾來人心は駸駸として此大事業に向うて進みつつあるも、

瓶中の魚は瓶を見ず、歐西の民衆は、今尚其相對的解放を以て絶對的と思惟す、是れ此思惟は乃ち絶對的解放の氣運の未だ大に至らざる所以たるなり。

何をか學術技藝の播種と謂ふ。希臘人、亦殊にアリストテレエスに於いて自然科學の造詣あり、此造詣の要素たる論理學は、文藝復興時代の學問回復に於ける一大要素として其講習を新にせられき。而も更に主要なる事象は、當時の社會組織の破壞に向うて大なる効果を寄與せる、物理化學の應用に成れる偉大なる發明なり。[二〇]歐人の未だ曾て夢にも知らざる者、夙く既に東方なる西亞人士の知る所となり、此に由りて封建制度の破壞せられたる實象は、恰も浦賀の礮響火輪船を齎して日本舊時の長眠を攪

二〇 例へば磁石火藥の如き是なり。

破せると一般。乃ち歐洲の思想界や、從來主として神人の關係と謂へる超絶心靈的事項に局せるもの、今は更に自然界現實界に向うて大なる興趣を感するに至り、[二一]卽ち茲に學術技藝の播種を成し了せり。此急轉なる時運の豫言者となりしは、卽ち英國のベエコン其人にして、アリストテレエスの論理學に相對して、此新學術研究の爲に其思想の方式の學理的示命を與へたるは、卽ち新論理學其者なりとす。

人心の解放は相對的に止まれりと雖も、此自然科學の研究に向うて從來宗教的專制が與へ來れる障碍は、全く茲に解除せられ、茲に新なる學術の播種は下され、而して長成繁茂の勢は爾來駸駸として進むを致し、乃ち自然科

二一 此現象は又美術の變遷に遡察すべし、歐洲の繪畫が、近世まで唯神、天使、及人の類なのみ畫きしは、大に歷史上の材料として考ふべきものなり。

學及其應用に屬する産業の發達は、遂に能く今日の盛運を呈するに至れり。産業の發達は更に社會的事項を要素とし、第十九世紀に於ける各國統制組織の較、整理に就きたるは最も之を促進するに與れり、就中特に擧示するの價値あるは、北米の新合衆國及英國なりとす、第十九世紀産業の發達は、此二國が統制上殆と完全なる泰平を致せるに因ること甚だ大なり、是れ此世紀の著明なる事項の一たり。

抑統制組織の整備の爲には、近世の社會的學科の進歩固より與りて力あるも、此二國の如きは寧ろ爲政家の技倆と民衆の性能の發達とに歸す可きが如し。社會的知識の中に就いて、第一に社會的理想の進歩、第二に經齊學の進歩は、民衆性能の發達と表裏を相成して進めるもの、此二國の國運の發達に甚だ與る所なきは法學の發達なり、最も法學の發達に負ふ者は獨佛二國なれども、耳食者流の想像する如く、法律は此二國にも甚だ大切なる役務を勤めざるなり、況て第十九世紀に於ける英米二國の社會には、既に所謂法律一統より一等前進せる泰平ありしは、識者の留心を要する所とす。

中世の終期に至るまで人心を桎梏し、而も是なければ彼封建制すらも維持に困難なりつべき、未開なる歐洲社會に、當時多少の功勞の認む可かりし耶蘇教は、斯の如くにして成れる歐西文明第十九世紀の造詣に對する、乃ち揚揚として言ふ、第十九世紀の文明は皆皆耶蘇教の賚な

りと、其厚顏寧ろ驚く可く、乃ち其人間性能の發達に於ける幾分の貢獻は否認す可きに非ざるも、自然科學の發達、産業の開展、曩には屢之を壓虐し、其成功に於いて悉く之を己が功と爲さむとする、其心術の陋や掩ふ可からず。

人心の解放の絶對的に非ざるが爲に、今や歐西社會の進歩は、諸般の方面に於いて弊所短所を現し、歐西の識者亦之が爲に憂慮する者、比比として然り。今之を吟味せむか。

第一。倫理道德の根本理想の吟味に於いて、耶蘇教の桎梏は遂に未だ脫せず、堂堂たる學者猶且無意にして此に陷りて免れざる者、比比皆然り。乃ち今日に於いて、自然科學の進歩彼が如く著大なるにも拘らず、自然科學と所謂心靈科學との間に鴻溝を劃して相調はず、宇宙の渾一的大觀の上に人性社會の根本理想を樹立するは、今や尙到着の企望だになきの慘況に呻唫す。蓋し識者が希臘の社會及其思想界の善美にして完全なる調和と自由とを欽仰して措かざるは、一たび之を回憶し思念するに於いて、這般宗教、桎梏の近世に於ける弊竇の絶大なるに對する懊惱を忘れむが爲なり。

第二。思想界に於ける此不調和は、やがて教化上に其大なる弊害を現せり。一面には産業の擴張が立國の至大要義となり、隨うて自然科學の教育の最も奬勵を要するに當り、他方には無意味極まる宗教の教條を以て兒童少年の心靈的教育を成さむとす。之が教育を受くる年少子女